イー・モバイルのタッチケータイ

タッチダイヤモンドは、最大7.2Mbps※の高速通信で、
オンもオフも楽しめる!

U-29 若者応援キャンペーン実施中! (～2009年4月30日まで)

詳しくは、店頭またはイー・モバイルホームページへ!

TOUCH DIAMOND
(S21HT)

※下り最大の通信速度です。最大通信速度はベストエフォート(規格上の最大速度)であり、実効速度として保証するものではありません。
なお、通信環境や混雑状況により通信速度が変化する可能性があります。＊掲載の機種は国内ローミングサービス対象外です。

マナーもいっしょに携帯しましょう。 有害サイトから子供を守る!

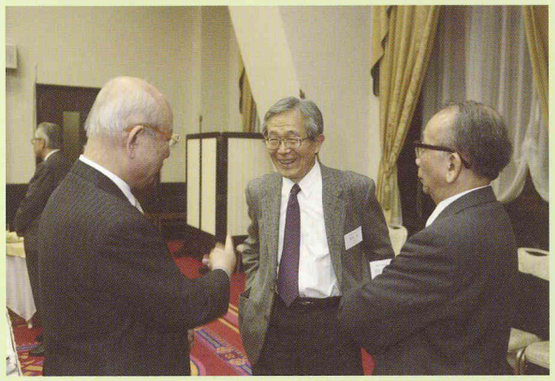
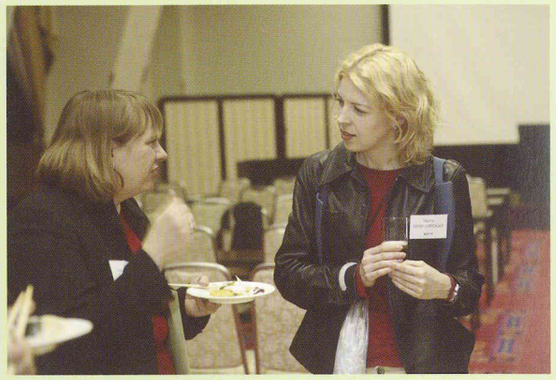
◎ロゴは各社の商標または登録商標です。○上記金額はすべて税込表記です。

カスタマーセンター 受付時間9:00～21:00〈年中無休〉 0120-736-157 イー・モバイル株式会社 http://emobile.jp

EMOBILE

TOKYO FULBRIGHT ASSOCIATION
東京フルブライト・アソシエーション
GARIOA FULBRIGHT
NEWSLETTER
No.21
December 2008

総会

フルブライト上院議員生誕100周年記念募金感謝・報告会

CONTENTS

		ページ
前グラビア　総会とフルブライト上院議員生誕100周年記念募金感謝・報告会		
同窓会メンバーから「フルブライト以後のわたし」		2
2008年度総会報告	①船橋　洋一氏講演	6
	②長坂会長挨拶　総会報告および決算	8
フルブライト上院議員生誕100周年記念募金感謝・報告会		10
日米教育交流振興財団の状況		16
2008年度財団奨学生冠名リスト		17
ガリオア・フルブライト同窓会の活動	①京滋同窓会	18
	②ジャーナリスト同窓会	18
	③建築・土木・都市・環境同窓会	19
ホスピタリティ委員会各種イベントの報告	①第33回日米交流チャリティ・ゴルフ大会	20
	②アメリカン・ニュー・グランティー歓迎会	21
	③国会・最高裁訪問	22
	④日光方面ツアー	23
	⑤鎌倉散策	24
東京フルブライト・アソシエーション沿革		25
セミナー（勉強会）報告	①鮎川　ゆりか氏	26
	②アラン・スミス氏	26
	③関山　健氏	27
世界フルブライト・アソシエーション第31回年次総会（北京）出席報告	①大野　熙　②福田　学	28
同窓会メンバーの掲示板	①新刊紹介『セクシュアル・ハラスメント』	30
	②日本写真保存センター	30
	③気軽にお茶を楽しみませんか	31
	④訃報　信原　尚武氏	31
事務局からのお知らせ		32
後グラビア　アメリカン・ニュー・グランティー歓迎会		

表紙写真＝下村　脩氏
長崎育ちの海洋生物学者。長崎大、名大、プリンストン大（フルブライト奨学生）他に在籍し、発光生物の権威。クラゲの緑色蛍光タンパク質の発見が、今回のノーベル化学賞受賞に結びついた。マサチューセッツ州在住。

同窓会メンバーから

「フルブライト以後のわたし」

外国で受けた親切をいまお返しする

島田　道子
1957 U. of Minnesota

我が家は１ヶ月に一度ぐらい外で食事を楽しんだ。これは昨年の暮、夫（昌彦）と娘(美砂)と３人で撮ったもの。

フルブライト留学は、私にとって自分で物事を決めていく人生の出発であり、厳しさと喜びと自分にとって幸福とは何かを教えてくれた経験であった。

3月に東京女子大卒業後、希望通り4月には東京大学大学院国際関係論に進学し、8月はミネソタ大学へ留学し、1957年は自信に満ちた時期だった。しかし、授業やセミナーは並やさしいものではなく、リーディング・アサインメントやレポートの多さに驚き、日夜図書館にこもっても、到底全部を読むことはできず、どうやってまとめようかと苦しみ、落ち込んだのが挫折の第一歩だった。

一年ちょっとの留学を終え、東大へ戻り、修士課程を修了した時点で、他の分野での自分を試したいと思った。教授の紹介で、アメリカ大使館USISの人物交流部や出版部の仕事をし、その後、米国出版社の企画宣伝を担当し、この仕事は楽しくやった。

第二の厳しさは、私のような経験をし、仕事をする女性への風あたりの強さだった。特に母親の年代の人達にとって全く相容れないものだった。私には当時、全く理解できなかったが、いま考えると、女学校を出て花嫁修業をちょっとやり、親のすすめる結婚をした人達にわかってもらえるのは無理だったのだと思う。

ミネソタ時代知り合った夫と、偶然東京で再会し、交際して結婚しようという時も、夫の母の大反対に遭い、結婚は30歳になるまでできなかった。しかし、この間、夫とはとことん話し合い、理解し得たのは、後の幸を運んでくれたのだと思う。夫が商社に勤めていたので、ヒューストンに10年、ベルギーのブラッセルに8年住み、ヒューストンではライス大学に通い勉学を再開したが、娘の誕生で断念した。アメリカ及びヨーロッパ中を旅行し、楽しい経験をすることができた。

ヒューストンでは、日本人学校が創設されたので、中等部を受け持ち、2人の児童が全国作文大会に入賞したのはうれしかった。また、ブラッセルでは、娘が通っていたインターナショナル・スクールの図書館でボランティアとして働いたり、中学の日本史の講義をしたりした。その時、日本史と世界史の年表を年代順に並べた表を作成したら、好評で、先生方に「ぜひ下さい」といわれたのもうれしかった。

日本へ帰国後は、夫が参加していた留学生のためのボランティア・グループの活動で、韓国や中国からの学生を家に招いたり、車で一緒に旅行したりして、よろこばれ、中国の留学生は今でも「お父さん、お母さん」と呼んで、メールをくれる。

昨年、娘も結婚し、これからゆっくり人生を楽しもうと思っていたのに、夫が夏に亡くなり、悲しく残念だが、ふりかえってみると、私の今までの人生は本当に幸せだったのだと思う。

これからも私のできる範囲内で、誰かのために役立つ人間になりたいと思う。外国で受けた親切を憶い出すと、それが小さなことでも心が暖まり、心をなごませてくれる力があることがわかった。

フルブライト以後の私「おひとりさま」の限界

神立　景子
1999 Columbia U.

2001年4月、修士論文のインタビューに応じてくれた、ＣＢＳのアンカー（当時、現在はＣＮＮのアンカー）、憧れのジョン・ロバーツ氏と。

2001年4月、キャピトル・ヒルで開催されたジョン・ケリー上院議員とテッド・スティーブンス上院議員との昼食会で。左からIIEのファーレル副会長、ブルガリアのオモータグ、筆者、メキシコのアレジェンドラ、ドイツのキリアン。

このところ、どっぷり日本につかっている。大学院留学プログラムで、コロンビア大学のジャーナリズム大学院に留学したのが、32歳のとき。あれから９年、現在は東京の米国大使館で働いている。環境問題の担当として、米国にインパクトを与えそうな日本の動きをウォッチして、東京からワシントンにレポートを書き送るのが日課である。

２年前くらいまでは、出張や休暇でワシントンやニューヨーク、パリ、ベルリン、イスラエル、カリブ海などへよく出かけていた。しかし、最近は経費削減で海外出張はほぼなくなり、休暇でも何をしているかと言えば、新宿や銀座で買い物やドキュメンタリー映画の鑑賞をしたり、読売新聞の「発言小町」というネット掲示板でいろいろな暮らしの知恵や人生のグチを読んだり、テレビショッピングで見つけた商品をインターネットで検索して最安値で買ったり、香りのいい石けんで長風呂に入るといった、いわゆる“Staycation”にふけっている。

あれほど海外に憧れ、夢だったフルブライト留学生になるために邁進し、休暇と貯金を貯めては外国へ出かけていたのが、この変わりようは何だろうか。

おそらく、おひとりさまで海外を闊歩するには、やや年を取りすぎたのだろう。25歳とか27歳くらいのときは、イギリスやアメリカのスーパーの陳列棚をめぐり、缶詰や化粧品などを手に取って横文字を追うことが、あるいは街角でほのかに違う香りの風を感じることが、外国や異文化への強烈な好奇心を刺激していた。しかし、41歳になった現在、すでにアメリカには10回以上、ヨーロッパにも７～８回は行き、そうした感性は失われつつある。むしろ外国の町を歩いても、独り身のむなしさが上回ってしまう。

友達はみんな忙しい。恋人もあてにならない。しかも、年を取るにつれ、自分が本当に好きなものでなければ、あえて他人につきあうということはしなくなるようだ。私自身をみればわかる。通勤のマイカーの中、帰宅後や週末は、だいたいクラシック音楽を聴いて過ごす。とりわけブラームス、そして中でも交響曲第４番は指揮者や録音年の違うCD９枚を持っていて、数えたわけではないが、軽く3000回以上は聴いているはず。おかげで、CDプレーヤーはだいたい２年で寿命が来てしまう。

２年前には、ベルリンフィルのブラームス交響曲第４番のコンサートのためだけに、週末にヨーロッパへとんぼ返りしたこともある。このときは、なんと最前列の真・真ん中のチケットが取れて、ちょうどヨーロッパ在住の友人と都合が合ったのだが、こんな私の道楽につきあってくれるケースはめったにない。

どこかに、また私に外国への好奇心を呼び起こしてくれる、いいパートナーはいないものだろうか。

『フルブライト ビフォア・アフター』

後藤　愛
2007 Harvard U.

３週間の乾燥した猛暑のアリゾナでの事前研修と、９か月間の大学院修士課程の留学を終え、2008年６月、私は成田に降り立った。新婚早々に、自由気ままな別居生活に文句も言わず、寛大な心で応援し続けてくれた夫（感謝！である）との再会のあと、私の心には、さながらクイズ番組のように次なるクエスチョンが浮かび上がってきた。

……「これから、古巣の組織に戻りつつも、一人の『個人』として、研究活動や生き様を続けてゆけるだろうか??」、と。

フルブライト受給の前後、つまり「ビフォア」と「アフター」で、私自身が一番変わったことはと言えば、それはおそらく一人の自律的なマインドを持った人間として考え、価値判断を下し、そして更に行動する、という習慣を身につけてきたことなのではないか、と思う。

かつて、「ビフォア・フルブライト」の私は、駆け出しの社会人としての行動様式を身につけるのに精いっぱいで、気がつけば、難しい意思決定は上司に委ね（組織として行動するには当たり前なのだが）、想定内の行動範囲を安全に動くというパターンが身に付きつつあったように思う。そして、このままではいけない、という強い危機感があった。

そこで、仕事にも慣れ、日本とアメリカの大学やシンクタンクの交流を促進する助成担当者としての仕事の醍醐味も味わい、ようやく周りからの信頼も得始めた入社3年目に、学生の頃からの夢――「フルブライトをもらってアメリカの大学院に留学する」――に、もう一度、本気で挑戦してみようか！と気合を入れ直したのであった。

幸いなことに、周りからの応援を受けることができ、職場には海外長期研修という制度もあって、更にフルブライトは社会人経験者にも広く門戸が開かれていたことも幸いし、何度も書き直したエッセイと、緊張の絶頂であった英語での面接も経て、何とか実現にこぎつけたのだった。

怒涛のような約一年を経て、今、「アフター・フルブライト」の私は、同じ職場の別の部署に戻り、ヨーロッパ、中東、そしてアフリカ地域における日本研究の振興の支援、またこれら地域と日本との知的交流の企画・実施に携わっている。

仕事の中で、フルブライトの経験が一番役立っていると思えるのは、なんと言っても、海外から日本に来るいろいろな研究者と接しているときである。大学の博士課程の学生から、教授まで、実に様々な方の相手をする。研究が順調な人もいれば、日本での生活に戸惑う人もいるし、家族の来日ビザで手間取る人もいる。その時に、フルブライトの受給者として、アメリカのデマンディングな研究環境で何人もの人に助けられてきた経験によって、一見トラブルに見える些細な問題が、実はすべて彼ら研究者の人間性そのものの表れであることを、私は身をもって知っているのである。そして、少しでも彼らの日本での経験をHappyなものにするために力を尽くそうという心に、自然となるのである。実際、彼らの滞在を支援することは、私の仕事の中で純粋に「楽しい」と感じられる瞬間である。

「フルブライト、ビフォア・アフター」、そんな番組があったとしたら、私は、家のリフォームさながらに、元の自分の屋台組みを生かしながら、機能的で自律的な、一個人になったはずである。中でも一番強まった柱は、組織のポジションや建前はとりあえずわきに置いておき、誰とでも一人の人間として接して関係を作る、という、極めて基本的な、しかし日本で社会人生活をしているとすぐ忘れがちな、人間としての態度なのだと思う。これからアメリカに旅立つフルブライターたちにも、この「人間力」を磨くということを、渡米目的に加えていただければ、その後の人生をより豊かにできるので、ぜひともお勧めしたい。

（2007年度大学院留学。ハーバード教育学大学院2008年教育学修士号（Ed.M.）。現在は国際交流基金日本研究・知的交流部欧州・中東・アフリカ課主任。フルブライト奨学生としての姓は荒木）

大統領選挙を体感した！

小栗　泉
2007　Johns Hopkins U. SAIS

40歳過ぎて会社勤めも約20年となると、それなりに会社での居心地はよくなるものの、先の自分の姿も透けてみえてきます。未来の自分に憧れや期待感、充実感を感じられるか。5年後、10年後の自分は本当に生き生きしているか。そんなことを考えた私は、「今さら改めて勉強する必要はない」と言う会社を辞めて、フルブライトジャーナリストコースの留学生としてワシントンDCでの生活を始めました。

ジョンズ・ホプキンス大学SAISでは、アメリカの政策決定システムや日米同盟の変質などについて研究しました。しかし最大のお目当ては大統領選挙です。前回の大統領選挙ではヒラリー・クリントンに日本メディアとして初めて単独インタビューを行いましたが、アメリカに住んだことのない私は彼女の言葉を単なる取材以上の肌感覚で捉えることが出来ませんでした。政治取材では「先を見通す」ことが大切ですが、その判断は十分なデータの上に立った感覚、勘によるところも大きいのです。日本の国内政治を10年以上取材してきた中でそれを痛感していた私は、アメリカ人の中に飛び込んで大統領選を体感しなくてはと自らを追い立てるように各地を飛び回りました。

ニューハンプシャーでは、オバマの演説会場を幾重にもとりまく若い男女とは対照的に、ヒラリーの演説途中にもかかわらず小さな学校の体育館を次々と後にする人達を目の当たりにして、政策や経験といった理屈だけでは一般の人を魅了しきれない大統領選の難しさを感じました。ワシントンDCからサウスカロライナまで片道7時間の道のりを他の選挙ボランティアとカープールして向かった車内では、初の黒人大統領もしくは女性大統領を生むかもしれない、その歴史を自分たちが作っているのだという強い当事者意識と共に、ブッシュ政権で傷ついた彼らのプライドを垣間見ました。「隣の家の住人は先週警察に捕まっていったよ」と黒人男性が顔を覗かせ、夕方になると街灯もなく真っ暗な低所得者用アパートでは投票所の場所を教えてくれと地図を書かされ、投票に足を運ぶ有権者の裾野の広がりを実感しました。デンバーの民主党大会でオバマへの支持を呼び掛けるヒラリーを見て号泣し、こんなことならマケインに投票すると話すヒラリー支持者に、未だ堅牢な「ガラスの天井」を思い知らされました。挙げればきりがありません。

帰国してまだ1か月ほどです。経験してきたことが今後どう生きるのか、全く見えていません。安定した仕事に結びつくのか、十分な収入が得られるのか。この年齢で、結果の保証されない挑戦をすることはとても怖いことです。でも「どうせ」とか「今さら」といった諦めを取り払って道なき道を進めることはとても幸せなことですし、それを後押しして下さったフルブライトには心から感謝しています。今、人生の第2ステージを前にわくわくしているところです。

（現職は日本テレビ放送網　報道局　ニュースキャスター）

シリコン・アレーの揺り籠
―'82年NYU大学院・留学記

小野　憲次
1982　New York U.

"Rolling Stone"（創刊1967年）の創刊発行人・編集長（現在も）セン・ウェナーと筆者

昨今の金融危機で、「26年ぶりの株安水準」と言われたが、その26年前の1982年、ニューヨーク大学大学院「テレコミュニケーション学科」に、フルブライト・ジャーナリストプログラムの一員として、留学する機会を得た。

82年当時迄、ジャーナリストプログラム奨学生は、大手新聞社・ＴＶ局・雑誌社の在籍者で占められていて、独立系の、しかも創設間もないＴＶ番組制作会社（テレビマン・ユニオン）からは、初めての奨学生であったようだ。

フルブライト委員会の試験・面接時、アメリカ人の面接官から、執拗なまでに、テレビマン・ユニオン（アメリカの「ユニオン」＝労働組合との相違?!）の実体について、また、当時の民放ＴＶ界の制作プロダクションのシステムに関して、質問された。当時既に日本の民放ＴＶ界も、アメリカのＴＶ界と同様、制作の外注化が進みつつあり、独立系の制作者たちが優れた番組作りをしていることを、時間をかけて説明したのを鮮明に記憶している。私自身の留学が、それ以降の多くの独立系ＴＶ制作者やジャーナリストに、留学への道を拓いたとするならば、今でも、その機会を与えて下さったフルブライト委員会に心から感謝する次第である。

留学先は、発足して2年目のニューヨーク大学大学院「インタラクティブ・テレコミュニケーション学科」を選んだ。70年代、「オールタティト・メディア・センター」として、「未来のメディア」の研究拠点であり、PBS（公共放送）の基本コンセプトについて書かれた "A Public Trust" の著者の一人であったレッド・バーンズ女史が、仲間と立ち上げた大学院の新学科であった。

80年代初頭、アップル・コンピュータに出会い、スティーブン・ジョブスにインタビューし、80年6月のCNNの開局に、「未来のメディアを予感」していた私にとって、26年後の現在でも、この“留学”は確かな選択であった、と自負している。

82年7月からの1年間、「未来のメディアの技術・制度・ビジネスの三側面」に関して、馴れない英語で、受講・議論・資料の読込み、そして、何度か、「日本のメディア状況」について、研究発表をする機会も得ることが出来た。

その発表の骨子である「メディアのデジタル化＋シームレス化＋グローバル化」は、その後の私自身の「メディア・ビジネス」のテーマとなっている。留学期間が終了（83年）した以降も、約20年間、ニューヨークに生活拠点をキープし、現在でも日米メディア間の仕事を続けているのも、このフルブライト留学のおかげに他ならない。

アメリカ・メディアを日本に導入した例は「エスクァイア」(82年)、「ハーパース・バザー」(2000年)、「ローリング・ストーン」(07年)、「タウン＆カントリー」(07年)、「ヨガ・ジャーナル」(08年)、シリコンバレー発のＴＶ番組等々である。

日本のメディア界が、「ガラパゴス化＝閉塞化」しないためにも、日本発の、よりグローバルなメディア開発の展開を目指していきたいと考えている。

東京フルブライト・アソシエーション 2008年度総会講演会

外交とジャーナリズムに「自立と自律」を

船橋　洋一（朝日新聞社筆）　1975 Harvard U.

私は1975～76年にフルブライターとしてハーバード大学のニーマンズ・フェローに在籍しました。朝日新聞社に入社したのは68年ですが、入社したての頃、編集局長室に呼ばれていくと、「これが号外だ。これから出す」といわれて見せられました。「ジョンソン大統領　大統領選に出馬せず」というものでした。ベトナム戦争が北のテト攻勢で泥沼化していた時でした。

最初に赴任したのは熊本です。警察回りが主でしたが、同時にベトナム反戦運動もさかんで、その取材でベ平連のアメリカ人とも知り合いました。オーティス・レディングの歌についてとか、サブカルチャーを話題にして会話のトレーニングにもなりました。全共闘が大学を占拠していたので、その内部をルポして来いといわれたんですが、なかなか新聞記者を中に入れてくれない。アメリカ人を連れて行くと、リーダーが「入れてやれ」と言って、ルポできたこともあります。水俣病の患者の家に泊まりこんで取材したとき、カメラマンのユージン・スミスにも教えられました。アメリカを通じて世界を見せてもらった気がします。

その後、福岡に転勤しましたが、あそこにはアメリカン・センターがあって、「フォーリン・アフェアーズ」のバックナンバーを読んだり、勉強会に招かれて講演を聴いたりしました。当時の、領事でいらっしゃったトマス・ハバードさんとはその後長いおつきあいをしています。後に、フィリピン大使、韓国大使を歴任されたすばらしい外交官です。

ニクソンのドル・ショックは東京で取材しました。アメリカ商工会議所に取材した時「暫定的」に導入されたはずの変動相場制について、ジェームズ・アダチという会頭に「暫定的ほど恒久的なものはない」と言われました。いまでもよく覚えています。彼の言う通りになりました。73年10月の石油ショックの時は中曽根（通産相）担当でしたが、中曽根さんは、「産油国との直接ディーリングだ」と独自路線を主張。大平さん（外相）は、「消費国が団結しなきゃいかん」とメジャー頼りで、二人がぶつかっていました。メジャーの意図はよく分からない。新聞記者としても、もっとニューヨークやワシントンＤＣの権力の中枢に直接取材できなければ本当のところが分からないと痛感した次第です。そんなこともあってハーバードに行ったわけです。

（プロフィール）

1944年、横浜市出身。東京大学教養学部卒業。朝日新聞社に入社、北京、ワシントンで特派員を経験し、93年から北米総局長。現在、主筆。日米関係、日米中関係問題について著書多数。

『ベスト＆ブライテスト』のデイビッド・ハルバースタムがニーマンズ・フェロー・プログラムに来たことがあって、親しくなりました。彼の言葉で印象的だったのはserendipity（掘り出し物上手）と言う言葉です。ゲイ・タリーズらのニュー・ジャーナリズムが騒がれていた時代です。物語から世界の核心を語っていく。そういうジャーナリズムのすごさ、楽しさにあこがれました。

80年代初頭は日米摩擦がつぎつぎに起こり、その摩擦の発火点、ミシガン、オハイオ、ケンタッキー、カリフォルニア、ペンシルバニアなど21州を全部を廻って取材しました。アムトラックで夜寝ていると、急にガタガタ揺れ始めた。ペンシルベニア州からオハイオ州に入ったんです。オハイオは保護主義で、メインテナンスが悪いからです。ピッツバーグで労組を取材しているとき、ラジオでブルース・スプリングスティーンの歌が始まると、みんなで歌う。「彼は、われわれの気持ちをいちばん分かってくれる」と言ってました。私も一緒に歌いました。

90年代はクリントンの時代です。出てきたときはゴアとの若いコンビが颯爽としていて期待したんですが、対日貿易政策は、「日本は異質な国」と決めつけ、われわれもショックが大きかったですね。クリントン周辺の人たちとはいまも親しく付き合っていますが。

日本の政治家、官僚たちは、いつも権力の座にある人だけしか相手にしない。だから権力の側にいないアメリカ人たちが日本に来ても、いい印象を持たないんです。93年の夏、クリントンにインタビューしたのですが、彼は「日本の野党は誰がリーダーなのか？」と訊くんです。彼は日本に来た時、パーティーに野党の代表たちも招きました。時の宮沢首相は大ショックでしたね。オーストラリアのケビン・ランド首相はこの前も外遊のとき日本を素通りしました。なぜか？　彼が労働党のシャドー・キャビネットの外相だったとき来日して、「日本の外務省トップに会いたい」と言った。日本側は「忙しくて会えない」と断った。ラッドさんは相当傷ついたようですね。シャドー・キャビネットの外相なのだから。それでは本当の外交はできません。

最近の日本はちょっと不安ですね。私がアメリカ総局長でワシントンに行っていたとき、ニューヨーク・タイムズのジョニー・アップルがマケイン上院議員に紹介してくれて、議会にも連れて行ってくれました。アメリカの親日派・知日派外交グループを「chrysanthemum club」といいます。海軍出身のリチャード・アーミテイジなどの「Popeye club」がそれに続きましたが、いずれもリタイヤです。次はどんな“クラブ”が生まれるのか？　それとももう生まれない時代に入ったのか。日米関係は全く新しい挑戦を迎えることになると思います。衰退する米国と停滞する日本が何を共通目標に誰がどのような関係をつくっていけるか。ちょっと見えにくいですね。アメリカにとって米中関係が最も重要な二国間関係であって、日本はまるで出てこない。それだけ日本が相対化され、日本への関心が薄れています。アメリカ全体がそう感じているんです。

私が朝日新聞社に入社した68年は、日本のGDP成長率が14.2%で、国民総生産が世界第２位になった年です。ワシントンの特派員に回った80年代は日本が昇り龍でした。冷戦終結後、日米関係は難しくなります。弱くなっていくアメリカも恐いですね。9.11後、アメリカの魅力が失せてきています。地球環境についても、アメリカは京都議定書に入らない。「中国やインドが入らなきゃ意味がない」なんて、アメリカの言うことですか！　日本はそのアメリカから圧力を受けなければ動かない。ガイアツ体質がしみついてしまった。いまはアメリカからの圧力が減ってきているから、日本の変革のきっかけがない。自分で改革の構想を作れないんです。

いま重要なのは日米中関係です。敵でもない、味方でもない中国。これをどうやってステイクホルダーにしていくか。日米中の協調関係をつくっていきたいですね。そのためのたくましい外交、タフな政策協議、リーダーシップ。そして、「自立と自律」――これらが日本に必要だと思います。

総会報告および決算

会長の総会あいさつ

長坂 健二郎 会長
1962 Columbia U.

本日はお忙しいなかお集まりいただき、まことにありがとうございます。

皆様には平素、アラムナイ・アソシエーションの活動にご支援をいただき厚く御礼を申し上げます。

まず、募金についてご報告しますと、第1表のような状況になっています。企業団体募金については目標2億円の約86%、また個人募金は前回より下回ったものの、前々回とほぼ同程度の水準となりました。これ以外に、財団を経由しないで直接日米教育委員会、あるいは米国国務省に振り込まれた寄付もあり、さらにチャリティーゴルフ3年分の収益も加えると、合計で2億8,100万円になります。さらにこのほかに、航空3社、ユナイテッド・エアラインズ、JAL、ANAから切符を頂戴していますから、それを全部換算しますと3億円は優に超えることになります。前回とはベースが違うので単純比較は正確さを欠くことになりますが、おおよそ、前回と同等、あるいはそれ以上の成果を挙げることができました。このように幅広いご支援をいただいたことに対し、この席を借りまして、厚く御礼を申し上げます。

募金活動以外の当会運営につきましても、この1年間順調に推移することができました。しかし長期的な視点に亘ってみますといくつか問題もあろうかと存じます。そこで原田監査役に委員長をお願いしてビジョン委員会を立ち上げ、検討をして頂きました。その結果をとりまとめたのがお手元にあります「ビジョン委員会報告書」であります。ここで指摘された諸問題のうち、私達の努力で解決できるものについてはそれぞれの委員会において取上げ、決着を図りましたが、やや長期的な問題が2点残りました。

第1は交換留学生数の減少です。第2表にもある通り、1950年代、60年代に比べ最近の留学生数は3分の1程度に減少しています。またこれを諸外国と比較しても第3表のように大きく下回っています。さらにこれを分野別にみると、第4表にあるように、

第1表　フルブライト上院議員生誕100周年記念募金

（千円）

	F100	前回
企業団体募金	172,839	218,945
個人募金	30,470	40,238
財団を経由しない募金	61,000	-
チャリティーゴルフ（05,06,07年度）	17,205	-
合計	281,514	259,183

（ドル建て分は1ドル100円で換算）

第2表　日米留学生年代別推移表

（人）

年代	日本人	米国人	合計	内募金分
1950年～1959年 平均	287	41	328	-
1960年～1969年 平均	213	42	255	-
1970年～1979年 平均	40	24	63	-
1980年～1989年 平均	66	42	108	13
1990年～1999年 平均	64	51	115	19
2000年～2005年 平均	65	60.2	125	20
2006年(1年間)	47	54	101	20
2007年(1年間)	46	54	100	22

第3表　2005/2006年度フルブライト奨学生数各国比較

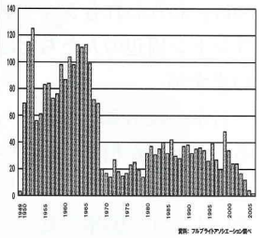
（人）

当該国	当該国→米国	米国→当該国	計
日本	64	40	104
韓国	52	147	199
中国	63	71	134
ドイツ	311	269	580
イギリス	80	81	161
スペイン	95	56	151
フランス	52	48	100

資料: Annual Report 2005/2006 for J.W.Fulbright Scholarship Board

第4表　職業別人数統計

	1952年	……	2007年	差
Academia	44		30	−14
Business	84		2	−82
Engineering	49		2	−47
Mass Media	10		5	−5
Teaching	39		5	−34
Others	17		2	−15
Total	243		46	−197



資料: フルブライトアソシエーション提供

第1図　年度別会員数（東京）

アカデミアに偏っており、ビジネス、エンジニアリング、教育等の分野の落込みが顕著です。

このように交換留学生の現状は絶対数が少く、分野別偏りが激しいという姿になっています。これを是正する為には財源（予算）を増やすこと、選考方法を改めることが必要です。財源については民間の募金を今後も継続して行うこと、及び両国政府に予算の増額をお願いすることの2点が欠かせません。今後日米両国政府への働きかけを精力的に行う方針です。また日米教育委員会に対しては選考分野の偏り是正をお願いする予定です。

第2は私達会員自身の問題です。第1図にある通り、1970年頃から新規会員数が大きく減少しています。当面この問題は所与のものとして受け止めざるを得ませんが、このままでは早晩、会費収入の減少と活動ボランティアの不足を招くことになりましょう。今からその備えをしておく必要があります。皆様の英知と積極的なご参加に期待申し上げる次第です。これには何よりもこの同窓会を楽しいものにすることが肝要かと思われます。次の1年、皆様と手を携え、共に進んで参りたいと考えています。何卒宜しくお願い申し上げます。

2008年度総会での各種報告

2008／2009年度役員（敬称略）

●会　長：長坂健二郎
●副会長：佐藤ギン子、千本倖生、竹内洋、住田良能、森本泰生、金田　新、グレン・S・フクシマ
●監査役：原田敬美
●Alumni Meetings　委員長：福田　学
　副委員長：神戸伸輔、増井志津代
●Hospitality Committee　委員長：島田道子
　副委員長：外池滋生、山田真之、大倉健太郎、五所恵実子
●Publicity　委員長：松尾秀助、今井章子
●Foundation Liaison　委員長：金田　新（兼務）
●顧問：渡辺　宏、行天豊雄、橋本　徹、金子尚志、開原成允、南原　晃

2007年度決算・2008年度予算比較表

（単位：千円）

	2007年度決算	2008年度予算
I　収入の部		
会費	5,344	5,000
寄付金	9	0
受取利息	13	10
募金手数料	2,460	3,000
ＰＣ賃貸料	120	120
広告料収入	350	350
雑収入	0	0
当期収入計（A）	8,296	8,480
前期繰越	14,683	15,641
収入合計（B）	22,979	24,121
II　支出の部		
旅費交通費	177	260
通信費	1,777	1,400
印刷費	929	750
什器備品	10	100
水道光熱費	170	170
修繕費	38	50
消耗品費	58	80
地代家賃	242	250
会合費	500	360
倉庫料	27	30
事務用品費	132	130
給料手当	2,596	2,600
奨学生費	131	200
支払手数料	15	20
図書購入費	19	20
会議費	168	120
雑費	0	20
予備費	0	300
当期支出合計（C）	6,989	6,860
当期収支差額（A）−（C）	1,307	1,620
100周年記念募金費用（D）	351	190
内　訳：		
通信費	(183)	(0)
印刷製本費	(20)	(0)
会議費	(112)	(150)
事務用品費他	(36)	(40)
50周年記念出版売却代金（E）	-2	0
次期繰越（B）−（C）−（D）−（E）	15,641	17,071

2007年度会務報告

07.04.18（水）　第11回セミナー（於山王グランドホテル貸会議室）
［講　師］今井章子　国際交流基金情報センター
［テーマ］グローバル化とプロセスの時代
［出席者］会員その他13名

07.05.18（金）　2007年度総会・講演会・懇親会（於国際文化会館）
［講師］グレン・S・フクシマ　エアバス・ジャパン（株）代表取締役社長
［テーマ］Globalization & Coporate Competitiveness
［出席者］会員・家族55名、招待者8名、合計63名

07.05.29（火）　米国人ニュー・グランティーのための国会および最高裁判所見学会
［参加者］米国人ニュー・グランティーその他14名、関係者数4名、合計18名

07.06.06（水）　フルブライト上院議員生誕100周年記念募金中間報告会
［出席者］吉田忠裕YKK株式会社代表取締役社長ほか40名

07.06.12（火）　J-FMF夕食ボランティア［協力者］26名

07.06.18（月）　J-FMF都市同行ボランティア常陸太田市、那須塩原市、杉並区、松本市各1名、計4名同行

07.06.18-19（月、火）　日光・宇都宮ツアー
［参加者］米国人ニュー・グランティー他15名

07.06.22（金）　フルブライト記念財団07年度第1回評議員会・理事会
（於JUSEC会議会）

07.08　ホスト・ファミリー・マッチング
［希望者］グランティー6名、会員8名

07.10.16（火）　J-FMF夕食ボランティア［協力者］22名

07.10.15（月）　第32回日米交流チャリティ・ゴルフ大会（於戸塚カントリー倶楽部）
［参加者］153名［募金額］471万円

07.10.22（月）　J-FMF都市同行ボランティア千葉市、大田区、胎内市各1名、計3名同行

07.11.01-04（木-日）　U.S. Fulbright Association 30th Annual Conference（Washington D.C.）に会員1名参加

07.11.9（金）　米国人ニュー・グランティー歓迎会/～7年留学生同期会（於グランドアーク半蔵門）
［出席者］ニュー・グランティー・家族18名、招待者22名、会員・家族38名、合計78名

07.11.23（金）　第4回鎌倉ウォーキング・ツアー［参加者］米国人ニュー・グランティーとその同伴者3名、会員・家族14名、合計17名

07.11.29（木）　第12回セミナー（於山王グランドビル貸会議室）
［講師］篠原総一同志社大学教授
［テーマ］中国経済のニュー・エコノミーについて
［出席者］会員他22名

07.12月　NEWSLETTER Vol.20 を発行

08.01.25（金）　第13回セミナー（於山王グランドビル貸会議室）
［講師］鮎川ゆりかWWFジャパン気候変動特別顧問
［テーマ］気候変動に日本は立ち向かえるか
［出席者］会員他25名

08.02.22（金）　2007年度定例役員会（於JUSEC会議室）

08.03.25（火）　第14回セミナー（於山王グランドビル貸会議室）
［講師］アラン・スミス在日米国商工会議所会頭
［テーマ］日本政府の行政指導・過去25年間における変化
［出席者］会員他22名

08.03.27（木）　フルブライト記念財団07年度第2回評議員会・理事会（於JUSEC会議会）

フルブライト上院議員生誕100周年記念募金感謝・報告会

「フルブライト上院議員生誕100周年記念募金」につきましては、日米両国の企業・団体にご協力をお願いする「企業・団体募金」を2006年に募金をはじめ、本年を持ちまして終了に至りました。又、ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会が1982年以降5年毎に実施してきた、同窓生個人を中心とする「第6回個人募金」も終了に至り、関係各位のみなさまに厚く御礼申し上げます（詳細は12〜15頁に記載させて頂きました）。

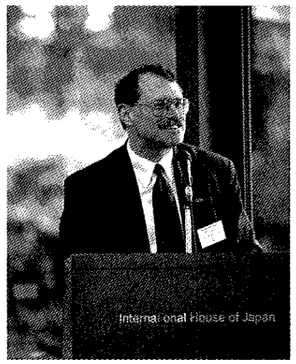
募金終了お礼の会

長年にわたったご協力を感謝すると共に、その報告をおこなうべく、去る6月5日(木) 午前12時から東京、六本木国際文化会館において、募金ご協力企業・団体、発起人、同窓生、関係者にお集まりいただきました。当日はあいにく天候に恵まれず、時間帯も昼間であったのにもかかわらず、多数のご出席をうることができました。

小笠原良雄元駐米大使、橋本徹ドイツ証券会社取締役会長、緒方四十郎前日米協会副会長、大野功統前防衛庁長官、金子尚志日本電気名誉顧問、佐藤ギン子（財)女性労働協会名誉会長、千本倖生イー・モバイル代表取締役会長、住田良能産経新聞社長、ロナルド J. オスト米国大使館公使、ピーター A.ノタリアニレイセオン・インターナショナル・インク代表など、日米各界を代表する方々が出席されました。

デイビッド・H・サタホワイト日米教育委員会事務局長の司会により、発起人代表大河原良雄氏の挨拶、ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会会長長坂健二郎の要を得た報告の後、大野功統衆議院議員の乾杯の発声で歓談に入りました。

約80名の出席者は、新緑の日本庭園を鑑賞しながら会館のビュヘットに舌づつみをうち、新旧の来客同窓生がそれぞれの話題、談笑に暫しの楽しい時間をすごしました。閉会の辞は、賀来景英・日米教育交流振興財団理事長が長年のご協力に感謝することでしめくくりとなり、散会の運びとなりました。



〈パソコンつきサロン新設予定〉

事務室隅、山積みの印刷物を倉庫にいれると、応接セットの横にパソコンがおけるようになります。ドイツのフルブライト同窓生はインターネットを中心に会員同士の交流密度をあげる上手なシステムを構築しています。留学時には同窓生は英語をキーボードでイヤと言うほど打ってきていて、“パソコン使い手”になるのはもう少しの努力が必要なので、苦手の人は練習できるようパソコンを用意します。会費分、会員のメリットを償却していただければうれしく思います。

フルブライト上院議員生誕記念企業・団体募金発起人

大河原　良雄　元駐米大使（発起人代表）
明石　康　日本紛争予防センター会長、元国連事務次長
有馬　朗人　日本科学技術振興財団会長
チャタベディ，ラヴィ　プロクター・アンド・ギャンブル・ジャパン代表取締役社長
張　富士夫　トヨタ自動車代表取締役会長
クライド，ロバート W.　AIGイースト・アジア・ホールディングス・マネジメント株式会社　会長兼社長兼CEO
福川　伸次　機械産業記念事業財団会長
グロンディン，ロバート F.　ホワイト＆ケースLLPパートナー
行天　豊雄　国際通貨研究所理事長
橋本　徹　ドイツ証券会社取締役会長
畠山　襄　国際経済交流財団会長
服部　禮次郎　和光取締役会長
開原　成允　国際医療福祉大学副学長兼大学院長
賀来　景英　日米教育交流振興財団理事長
金澤　一郎　日本学術会議会長
金子　尚志　日本電気名誉顧問
勝俣　恒久　東京電力取締役社長
小枝　至　日産自動車取締役共同会長
松本　大　マネックス証券代表取締役社長CEO
三木　繁光　三菱金曜会世話人代表
ミラー，ダン　サン・マイクロシステムズ代表取締役会長
御手洗　冨士夫　キヤノン代表取締役会長
宮内　義彦　オリックス代表執行役会長・グループCEO
中村　芳夫　日本経済団体連合会事務総長
丹羽　宇一郎　伊藤忠商事取締役会長
野依　良治　理化学研究所理事長
小笠原　敏晶　ニフコ／ジャパンタイムズグループ代表取締役会長
緒方　四十郎　日米協会前副会長
岡本　道雄　京都大学名誉教授、日独文化研究所所長
大河原　愛子　マール　ジェーシー・コムサ代表取締役会長
大野　功統　衆議院議員、前防衛庁長官
オァー，ロバート M. Jr.　ボーイング　ジャパン　社長
大歳　卓麻　日本アイ・ビー・エム代表取締役社長
ピーターソン，ダグラス L.　シティバンク，N. A. チーフ・エグゼクティブ・オフィサー　ジャパン
ポルテ，ティエリー　新生銀行取締役代表執行役社長
佐治　信忠　サントリー代表取締役社長
佐藤　ギン子　女性労働協会名誉会長
千本　倖生　イー・アクセス代表取締役会長
住田　良能　産経新聞社代表取締役社長
鈴木　茂晴　大和証券グループ本社代表執行役社長
高垣　佑　国際文化会館理事長
寺澤　芳男　東京スター銀行取締役
津島　雄二　衆議院議員、元厚生大臣
氏家　純一　野村ホールディングス取締役会長
渡邉　宏　東陽テクニカ監査役
八幡　恵介　IAIジャパン理事長
吉田　忠裕　YKK代表取締役会長兼社長
吉野　浩行　本田技研工業取締役相談役

＜各地区同窓会会長＞

長坂　健二郎　ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会会長
関口　恭毅　北海道ガリオア・フルブライト同窓会会長
吉川　清隆　ガリオア・フルブライト東北同窓会会長
藤本　博　ガリオア・フルブライト中部同窓会会長
藤原　哲也　北陸フルブライト・アソシエーション会長
岩山　太次郎　ガリオア・フルブライト京滋同窓会会長
牧野　信夫　ガリオア・フルブライト大阪地区同窓会会長
木村　榮一　ガリオア・フルブライト中国地区同窓会会長
太田　英章　ガリオア・フルブライト四国同窓会会長
稲垣　良典　ガリオア・フルブライト九州同窓会会長
比嘉　幹郎　ガリオア・フルブライト沖縄同窓会会長
林　啓一郎　ガリオア・フルブライトニューヨーク同窓会会長

フルブライト上院議員生誕100周年記念企業・団体募金寄付者芳名録

（2008年10月31日現在）　　（単位：円または米ドル）

年度	寄付金額		企業・団体・個人名（敬称略）		
2005年度	企業・団体合計 13,905,500	5,905,500	ジブラルタ生命保険株式会社		
		5,000,000	本田技研工業株式会社		
		1,000,000	野村ホールディングス株式会社	株式会社ニフコ	伊藤忠商事株式会社
2006年度	企業・団体合計 55,873,100	10,000,000	財団法人吉田育英会	トヨタ自動車株式会社	
		5,750,500	ジブラルタ生命保険株式会社		
		5,000,000	三菱金曜会	キヤノン株式会社	
		2,000,000	米国メルク社		
		1,122,600	AIGカンパニーズ日本・韓国地区		
		1,000,000	キヤノンファインテック株式会社	キヤノン電子株式会社	キヤノン化成株式会社
			キヤノンマーケティング・ジャパン㈱	キヤノンアネルバ株式会社	日産自動車株式会社
			株式会社産業経済新聞社	アイシン精機株式会社	イー・アクセス株式会社
			株式会社大和証券グループ本社	ハリマ化成株式会社	鹿島建設株式会社
			株式会社大林組東京本社	株式会社ジェイテクト	日本電気株式会社
			財団法人国際経済交流財団	三井不動産株式会社	
	個人 合計4,500,000	2,000,000	匿名		
		1,000,000	匿名	ティエリー・ボルテ	
		300,000	大内　博		
		200,000	大野　功統		
2007年度	企業・団体合計 65,675,000	10,000,000	財団法人吉田育英会	トヨタ自動車株式会社	
		5,000,000	日本税理士会連合会	株式会社デンソー	三菱金曜会
		5,514,000	ジブラルタ生命保険株式会社		
		3,000,000	株式会社　日本経済新聞社		
		2,000,000	武田薬品工業株式会社	プロクター・アンド・ギャンブル・ジャパン株式会社	
			株式会社　読売新聞東京本社		
		1,161,000	AIG East Asia Holdings Management KK		
		1,000,000	富士ゼロックス株式会社	楽天株式会社	株式会社大島造船所
			日産自動車株式会社	豊田通商株式会社	株式会社豊田自動織機
			大日本インキ化学工業株式会社	住友化学株式会社	三井化学株式会社
			住友電気工業株式会社	株式会社商船三井	松下電器産業株式会社
			レイセオン　インターナショナル　インク	サントリー株式会社	富士通株式会社
	個人合計 4,950,000	4,950,000	匿名		
2008年度	企業・団体 合計28,994,136	10,000,000	吉田育英会		
		5,000,000	トヨタ自動車株式会社		
		3,000,000	米国メルク社		
		2,000,000	株式会社朝日新聞社		
		1,059,040	AIG East Asia Holdings Management KK		
		1,000,000	日本電気株式会社	大阪ガス株式会社	清水建設株式会社
			日野自動車株式会社	株式会社日立製作所	株式会社毎日新聞社
			第一三共株式会社		
		935,096	日本公認会計士協会		
企業・団体募金合計		173,897,736			

フルブライト上院議員生誕100周年記念第6回個人募金寄付者芳名録

（敬称略）（2008. 9. 30現在）

100万円（3名）　田崎　邦男　服部　廣子　高向　巌
50万円（1名）　八幡　恵介
30万円（1名）　亀山　博子
20万円（3名）　佐藤　満秋　山口　正俊　京滋同窓会
15万円（1名）　大河原　良雄
13万円（2名）　太田　英章　徳永　勉
12万円（1名）　藤島　昭
1,000ドル（1名）　林　啓一郎
11万円（1名）　渡邉　博
105,000円　報告会参加費
10万円（51名）　渡辺　彦憲　日比野　日出雄　有江　幹男　明石　康　中地　宏　行天　豊雄　田辺　龍郎　寺澤　芳男　吉田　静雄　川又　良也
西　彰五郎　大内　博　内古閑　俊二　橋本　徹　岩山　太次郎　金子　尚志　口羽　益生　あきば　じゅんいち　高橋　剛夫　南原　晃
尾崎　行信　梶谷　玄　正野　敏夫　長坂　健二郎　長坂　淳子　松下　重悳　佐藤　ギン子　大江　建　竹内　利枝子　伊藤　克敏
開原　成允　村上　英二　賀来　景英　熊本　信夫　橋本　秀一　文野　千年男　山川　洋一郎　渡辺　昌昭　鍋嶋　敬三　林　弘子
林　紘太郎　牧野　信夫　金田　新　亀口　憲治　福田　学　関口　恭毅　山田　裕子　外池　滋生　和田　賢治　本間　佳子
高垣　佑
9万円（2名）　江見　弘武　小原　望
8万円（1名）　伊勢亀　冨士朗
7万円（1名）　高間　敬一
6万円（10名）　佐々木　徹郎　増田　信彦　緒方　四十郎　妹尾　泰利　藍山　淳　金辻　信弘　阿部　晃夫　太田　隆次　宮川　圭治　西岡　英毅
500ドル（1名）　難波　達治
57,040円（1名）　岸　義人
5万円（66名）　岩橋　文吉　嶋　正彦　野上　燿三　渡邉　宏　高田　良一　堀江　昭　小西　輝明　遠藤　政章　伊藤　ノブ夫　匿　名
清水　護　山本　博　板倉　武子　玉置　文一　中根　宏　藤崎　博也　松本　登美　鈴木　明子　隅出　昂伸　水谷　純也
柳澤　昭雄　清水　昭敏　新堂　庄二　曽野　和明　早川　俊一郎　吉村　徳重　飯田　忠三　桐渕　利博　小泉　卓也　三浦　健
神谷　傳造　佐々木　肇　遠藤　治郎　多米　豊　羽鳥　博愛　八木　博司　朝隈　六郎　岡本　正敏　掛川　トミ子　黒岩　宏
小松　雄介　笹沼　澄子　植田　英彦　山田　昭廣　木下　毅　長濱　毅　後藤　昇弘　高橋　一修　舟橋　定之　吉川　素三
杉山　武彦　龍岡　資晃　菅野　和夫　竹内　洋　清澤　悟　飯田　亘之　古城　誠　河上　誓作　清野　真巳子　宮下　佳之
江端　貴子　杉山　茂　藤本　雅美　丸山　富久治　山田　亨　高井　延幸
4万円（29名）　大城　判　柴田　正雄　野津　良夫　渡邉　一　新垣　盛一　金山　崇　近藤　好博　田部　浩三　中村　健　亀谷　麒與隆
山西　貞　ランデス　ハル　八木　達彦　目片　守　太田　洋三　赤岩　英夫　石井　悠　入交　昭一郎　金城　政英　小柳　知彦
牧本　次生　岩瀬　悉有　鹿山　光　小山　修三　板谷　絢子　鬼界　彰夫　西村　逸夫　岩田　靖夫　内多　潔
3.5万円（1名）　伊藤　陽一
3万円（114名）　山田　邦子　伊東　克己　海辺　不二雄　飯島　美枝　高田　敬子　穂積　タツエ　吉田　文武　小菊　喜一郎　斉藤　礼子　中平　立
西村　史郎　能美　和夫　三角　哲生　山本　昂　作田　沢秋　仁科　雄一郎　比嘉　幹郎　虫明　康人　香西　理子　小林　晴夫
海老根　宏　木村　和夫　小宮　隆太郎　辻　二郎　三谷　哲美　岩田　千男　大下　道　島田　道子　杉山　洋子　山下　竹二
吉川　清隆　石川　英彦　犬飼　通之　榎本　太　武富　保　塚原　勇　向山　義彦　奥宮　実枝子　奥村　俊明　国武　豊喜
重井　達朗　若月　三喜雄　土岡　弘通　那須野　精一　藤田　榮一　石田　晴久　加野　忠　川端　潔　立脇　和夫　福井　治弘
安藤　仁介　宇宿　源太郎　小指　軍夫　小畠　啓邦　野村　恭也　裏原　敬　會田　勝　青木　茂之　安孫子　保　一瀬　智司
勝山　京子　桜田　鐵之助　鳥羽　良明　伊崎　和夫　岩動　孝一郎　栗原　彬　多田　愈　三澤　慶子　大井　孝　瀬在　幸安
田中　榮治　田中　信昭　抜山　映子　北川　正樹　高井　新一郎　田村　坦之　根本　治　村尾　裕史　加藤　和夫　高桑　昭
中田　一男　大塚　和徳　大山　道廣　西條　隆雄　下川　洋市　林　敏彦　松原　光法　渡辺　寿恵子　大久保　貞義　仲本　幸文
小浪　博英　久保田　敬一　定森　大治　松田　武　高坂　健次　白井　孝昌　浜口　登　落合　太郎　久世　篤　佐々木　公明
住田　良能　小柴　徹修　石原　直紀　嘉指　信雄　美濃　正　和田　昭穂　西崎　文子　西田　昭彦　渡辺　信二　内山　弥生
熊野　善介　谷　聖美　尾崎　俊哉　久保　文明
2.5万円（5名）　岩根　典夫　岡　政昭　横田　昌幸　匿　名　西野　喜一
2万円（277名）　山田　久美子　内藤　泰朗　ウェルズ　恵子　阿部　直也　内田　浩史　魚住　真司　今井　章子　梶原　和子　中嶋　康輔　橋口　保夫
八木　健三　東江　康治　貴家　実　河野　豊弘　昆野　卓二　吉見　吉昭　佐野　圭司　宮崎　榮一　泉　三和子　泉屋　信夫
上田　明子　遠藤　晴子　岡一　勇三　河野　宗夫　後町　幸枝　近藤　健啓　坂本　昭雄　福田　智　宮良　用英　稲永　和豊
氏家　昭一　岡田　光二　小柴　昌俊　高橋　久　山本　澄子　池園　悦太郎　狩俣　真彦　小玉　敏子　嶋田　正生　野津　寿満子
太田　次郎　井出　義光　稲見　芳勝　伊良波　長東　小村　幸友　佐久間　徹　里吉　榮二郎　島袋　栄一郎　西岡　淑雄　星野　命
丸田　博美　皆川　達夫　宮本　昭正　師岡　愛子　太田　千義　小林　邦彦　斉藤　善一　白岩　謙一　藤井　幸雄　磯部　朝彦
大平　博一　奥村　有敬　尾前　照雄　川村　安宏　西村　周郎　畑　光夫　一松　信　皆川　貞一　三船　意麥武　本山　和男
森川　定雄　金澤　正剛　斉藤　一郎　寺田　一郎　中村　恒善　原　正　前川　正子　前田　謙二　吉武　香代子　米田　宏
有馬　朗人　池田　政利　岩崎　秀一　加瀬　正幸　田口　芳弘　中内　恒夫　初音　嘉一郎　平井　満夫　松坂　兵三郎　三輪　誠
森口　兼二　宇佐美　滋　北川　勲　木村　克美　楠川　絢一　徳山　盛保　波多野　義郎　宮城　真宏　山本　明夫　山本　茂
荒川　民雄　衛藤　瀋吉　大橋　康隆　加藤　幹雄　金井　久雄　河合　忠一　鈴木　誠道　堤　剛　永井　裕　能美　良作
林　暢夫　保谷　六郎　利彌　越城　飯田　一根　伊部　泰子　小木曽　茂　笠原　威子　吉良　枝郎　日下　厳　櫻井　春輔
田中　武雄　鳥塚　莞爾　渡邉　毅　赤松　勉　上田　慶一　牛島　俊明　片山　宗一　衣笠　茂　木村　榮一　木村　汎
小池　茂彦　小林　昭一　高田　源太郎　竹内　澄夫　西原　鈴子　水谷　昭　水口　紀勢子　山澤　逸平　山本　榮一　荒牧　典俊
石井　かほる　牛込　新一郎　岡田　淳子　奥山　恒朗　菅野　富夫　北村　和人　近藤　いね子　坂本　宗仙　佐々木　みよ子　白鳥　正喜
菅原　彬　荘口　博雄　高濱　素秀　舘石　捷二　田村　達也　本多　獅子太郎　池上　雄作　太田　宏　木村　義人　小泉　正明
小林　充尚　駒野　徹　徳丸　実　中村　廣治郎　濱田　邦夫　原田　契一　丸山　勝一　池田　正澄　伊禮　恒孝　大国　真彦
大津　誠　開原　久代　坂田　禮彦　島田　良一　高澤　廣茂　高山　巌　戸田　三三冬　菱田　浩子　広江　尚司　増田　義人
岡田　明久　楠原　偕子　小林　浩　小牧　元　砂川　真　千本　倖生　田島　穆　田部　滋　所　一彦　中尾　祐治
永野　順一　長谷川　明子　大榎　茂行　加島　聰　川又　邦雄　小松　俊典　半田　敏雄　東谷　公　福岡　捷二　吉川　精一
泉　徳治　岩倉　國浩　平良　勉　両角　光男　青木　邦夫　森岡　芳洋　本下　宗士　清水　新二　原田　敬美　山本　雅
石川　正　福田　京一　吉野　直行　池田　暁彦　片山　貞雄　グルットレ　秀子　白井　洋子　田中　久男　津田　葵　山田　真之

美添 泰人　小島 平夫　早川 操　山本 博　鷲津 浩子　小山 敏夫　伊原 正　小島 秀夫　古田 和子　井上 貴照
緒方 明子　塚田 守　中薬 和津次　市川 新　圓月 勝博　古城 佳子　坂本 勉　巽 孝之　寺澤 久美子　大津留 智恵子
小倉 いずみ　金原 恭子　横山 良　五十嵐 武士　石川 眞澄　伊藤 韶子　森田 幸夫　池田 憲昭　石原 敏子　小野 佐和子
中川 敦子　堀 元　村上 清敏　高野 義雄　服部 敏彦　大竹 文雄　日野 圭子　白井 義昌　大津 章　窪薗 晴夫
韋井 次郎　中島 和江　松浦 以津子　鮎川 ゆりか　都河 明子　谷澤 正嗣　上田 優子　岡 眞人　七戸 佳子　河野 公美
後藤 あや　矢向 明子　前川 啓治　川俣 美由里　根本 幾　若林 喜久男　松尾 正弘

1.8万円（1名）　藤井 建人
150ドル（1名）　マックナイト 道子
1.5万円（11名）　宮崎 誠也　山本 正弘　北川 孝二　古谷 善平　滝川 秀子　下條 貞友　仲本 貞夫　柳原 尚明　匿 名　下野 武彦
藤川 勝
1.3万円（2名）　須山 静夫　一柳 邦男
1.2万円（2名）　武内 憲治　森 哲郎
100ドル（3名）　橋本 英二　塚田 義明　ハドソン 木村歌子
10,100円（1名）　佐藤 敏雄
1万円（523名）　奥野 由樹子　下河辺 美知子　田村 陽子　溜箭 将之　齋藤 勝彦　桐生 賢蔵　万木 孝雄　石井 一也　井口 曜子　今西 基茂
上田 眞佐子　尾渡 達雄　石塚 俊子　栗山 茂光　小村 昭子　杉山 忠一　天満 美智子　中島 粂男　仲唐 義夫　中野 睦治
野田 春彦　堀 菊子　安倍 勇　飯盛 亨　井上 和子　岸 正明　栗山 徳　澤田 昭夫　柴田 實　高仲 顕
長命 俊子　富森 叡児　中村 登士子　縫田 曄子　福間 欣一　前田 多良夫　矢吹 二郎　吉井 美知子　宮里 政邦　伊藤 太郎
瓜生原 二郎　江夏 弘　大島 秀夫　小川 清　興津 達朗　加藤 皓　黒川 清孝　河野 照　小寺 敏一　嶋村 篤子
下地 正雄　田賀 春雄　高橋 春治　比嘉 廣好　平山 務　松井 哲　松下 康雄　松本 晴子　真鍋 舜治　宮本 一郎
森田 貞雄　山田 豊太郎　植村 攻　大木 道則　太田 正利　岡田 清　片方 善治　金築 修　川平 朝清　久代 佐智子
小平 清　寿岳 潤　鈴木 伸　高尾 健嗣　高木 和子　高木 康敬　田島 重雄　馬場 圭史　堀田 進　柳ケ瀬 勉
柳田 友道　山中 千代衛　安藤 賢一　石田 名香雄　稲田 邃　小倉 義光　小田 富士夫　越知 隆　加藤 勝三　栗田 修
住山 正男　高山 修　中澤 次郎　中村 博　福岡 醇一　松下 公昭　山崎 純男　大湾 朝明　猪飼 公郎　石川 知雄
石志 悦郎　一色 義子　木村 尚　久埜 百合　小西 健二　小林 克彦　佐倉 リン子　笹井 常三　重光 武徳　澁谷 喜三郎
砂川 恵伸　滝口 正史　土光 文夫　林 卓男　松崎 啓　村上 幸人　森田 矢次郎　新井 明　糸藤 洋　今堀 和友
延與 三知夫　大原 宏道　小田 幸信　神里 常雄　川北 幸男　北村 慶五　小林 薫　沢口 悦郎　島田 幸三郎　清水 滋
千野 静香　茶谷 裕子　對馬 エキ子　常松 正雄　長嶺 和治　中村 元臣　堀 幸夫　本田 実浄　三木 吉治　安田 三弥
吉田 昭　伊木 和子　石川 重俊　岡本 文雄　小西 弘子　篠崎 達夫　杉村 隆　瀬名波 榮喜　長浜 洋一　名取 靖郎
濱崎 隼彦　東原 芳彦　吉田 玲子　若井 一朗　赤羽 賢司　鵜川 四郎　江本 進　岡田 美沙子　神山 五郎　朽津 耕三
斎藤 佳雄　田中 達夫　田鍋 薫　田名部 雄一　新山 英輔　長谷川 恭子　長谷川 洋　藤原 浩　堀 憲明　諸富 浩
山口 辰良　阿曽 佳郎　阿部 龍蔵　井政 実　石井 明　今井 正也　大内 伊助　小野 昭一　神谷 笑子　河野 通
後藤 和彦　齋藤 和子　斉藤 正男　新堀 通也　菅原 眞一　竹尾 治一郎　永井 輝夫　中村 和郎　中村 英勝　西原 正
根岸 重治　平井 英夫　松村 實　三好 勇夫　向井 利夫　室伏 靖子　横井 政時　興座 豊治　吉田 ルイ子　石倉 知之
岡崎 恒子　川満 敏　蔵本 築　近藤 康男　下村 健次　関 晴子　高橋 悠　高橋 義彌　田中 健藏　付岡 京子
成田 仁　西田 浩太郎　日根 文男　堀江 滋夫　本間 龍雄　真栄田 司　横井 義則　池田 吉尭　大志万 一徳　勝見 愛子
勝見 允行　小谷 晋一郎　坂本 義行　シュベネマン 僧美　菅原 邦朋　鈴木 淳一　鈴木 不二男　関根 泰次　高瀬 文志郎　千種 秀夫
常木 清　二宮 裕子　長谷川 晃　深尾 凱子　福崎 多恵子　堀 俊雄　宮崎 基則　宮田 元　村松 正實　村山 磐
山本 雅英　吉村 眸　石井 丈夫　稲垣 良典　今村 宏　上田 俊男　江藤 善清　原田 朋子　大橋 守　大森 郁朗
河原 菊枝　小池 勇　小石 秀夫　古島 実　佐治 愿　菅野 道廣　寺田 秀夫　内藤 順敬　野中 忍　橋本 宏
濱田 宏一　松本 時夫　村田 安雄　森園 俊夫　安 威子　秋枝 蕭子　乾 恒夫　小宅 弘道　片山 俊　小池 美佐子
近藤 雅臣　佐々木 彬夫　佐藤 洋一　島袋 伸三　竹藍 幸生　田中 登美　戸川 清　久間 利昭　平野 健一郎　三宅 彰
村山 登　柳川 浩一郎　横川 浩　吉井 祐藏　浅羽 禮子　江口 昇次　大塚 和弘　奥村 幸信　加茂 雄三　金城 盛栄
日下 喬史　酒井 敏明　佐々木 行雄　篠田 靖子　下河内 稔　鈴木 博　中原 俊明　中村 卓　根谷崎 敏彦　南風原 孝
橋本 滋男　長谷川 嗣夫　東 璋　引地 岳雄　藤木 文弘　別所 清　奥座 章健　安里 文雄　飯島 浩一　飯守 泰次郎
石崎 貞明　大井 玄　大井 美美子　岡本 清　小野澤 康輔　熊澤 善三郎　黒田 定明　紫芝 良昌　下 康郎　杉本 恒明
鈴木 浩一　田隅 三生　田村 善之　中江 純夫　松本 薫　三好 正満　村川 章一郎　毛利 昌史　山下 卓哉　横山 陽代
飯野 暢　加藤 源　久我 行子　佐伯 胖　山藤 泰　島袋 鉄男　杉村 棟　須磨 幸蔵　中田 一郎　名幸 正行
肥田 良夫　船坂 宗太郎　松永 和人　三浦 尚之　宮 正義　山岡 尚志　弓狩 康三　芳澤 毅　一郷 正道　占部 道敏
尾添 郁子　落合 卓四郎　島田 法子　砂田 一郎　高橋 一生　田中 四郎　田辺 美也子　寺田 溥　榎岸 毅　山本 尚
梅沢 時子　太田 浩　大塚 和徳　大鍋 謙一　嘉儀 隆　北垣 宗治　酒井 敦子　西山 勝雄　浜田 文雅　藤田 幸雄
松井 倫子　松下 菊人　水本 廸子　山本 和之　井関 正裕　知念 拡　谷中 寿子　山名 章二　有賀 夏紀　石垣 博美
鴨川 卓博　小堀 巌　田嶌 淳子　手塚 一男　野澗 龍雄　秋山 道彦　菅野 峰明　栗原 豪彦　塩見 法弘　波多江 健郎
池内 武　市川 整　木村 健治　斎藤 智　竹内 正昭　永峰 卓夫　小田切 宏之　加瀬 豊司　鈴鹿 芳康　千田 紘一
濱四津 尚文　三木 健二　黒坂 佳央　丹羽 隆昭　橋本 満　比嘉 美代子　大山 綱夫　楢崎 寛　早見 弘　細谷 正宏
川岸 繁雄　須藤 眞志　武田 建　畫間 文彦　松尾 秀助　小林 史子　渡邉 真理　青柳 真智子　伊藤 章　小野 浩
宮澤 節生　梅本 哲也　丸山 英二　村山 淳彦　渡邊 健一　高 哲男　高瀬 理美　寺地 功次　戸澤 健次　竝木 崇康
野上 秀雄　松本 一裕　小川 富由　神徳 昭甫　常深 建雄　坪井 由実　森田 正實　荒川 薫　井上 正　小松 良正
柴田 元幸　折島 正司　佐原 亜子　早川 与志子　伴 金美　山本 順寛　北村 喜宣　重松 宗育　浜田 健生　藤井 信行
南 保輔　飯野 智也　大堀 壽夫　古澤 頼雄　島 久代　宮永 園子　和田 光弘　石幡 直樹　伊藤 憲彦　井上 眞理子
神戸 伸輔　黒田 誼　野口 徹　橋本 高明　平賀 正子　松井 真　丸山 孝一　我妻 ゆき子　井上 龍子　神本 忠光
グレーヴァ 香子　佐伯 三麻子　箕浦 康子　山田 政通　青島 矢一　堤 浩之　福重 元嗣　藤原 聖子　杢尾 雪絵　山田 敦
木南 敦　白石 文子　相馬 勝　内藤 昭男　樋口 晴彦　後藤 和彦　高階 悟　藤森 万代　松島 たかね　安井 美代子
吉田 光宏　西元 弘子　鮎川 潤　渋谷 恵　伊勢田 哲治　川島 正樹　川村 保　宮原 哲　瀧口 範子　結城 正美
磯辺 康子　井上 信一　小泉 令三　田中 京子　林 奈津子　菊池 繁夫　渡邉 健介　会田 薫子　池田 京　斎藤 史枝
武田 雅子　森下 公江　土屋 由香　久野 明子　野坂 佳生　山口 雅夫　塚本 裕之　栗田 幸雄　中川 幾一朗　旭 信昭
津田 四郎　安倍 譲治　野崎 幸雄
1万円未満（60名）　安里 祥徳　片山 明石　蝋山 道雄　波多野 裕造　山村 庄亮　小川 直子　永積 太郎　萩原 久美子　加藤 朝子　鈴木 恭
境 弘子　島内 武文　足立 昭夫　伊藤 清　松本 繁雄　高木 誠　比嘉 寛　谷口 巳佐子　宮 正夫　稲垣 春男
三浦 幹男　小方 芳郎　兼松 重任　藤井 多恵子　星野 美賀子　前田 専学　森 美郎　赤嶺 健治　宮本 順伯　伊藤 信隆
田中 力　荒谷 淑子　飯島 孝夫　伊藤 真男　飯野 正子　西 満　星 克治　沼野 元義　三村 信男　橋爪 祐美
中田 和子　菅谷 淳子　武黒 麻紀子　田辺 智子　増田 尚子　相佐 明一　碧海 美代子　福島 敏太郎　岡本 良平　望月 和子
内田 市五郎　宮原 英夫　近森 明彦　苅谷 剛彦　浦野 真理子　平木 多賀人　Kate Allen　村山 淑子　伊藤 誠　中島 道郎
30ドル（1名）　井上 由紀

合計　1178名　30,800,213円

第6回個人募金実績表

（2007年10月31日現在）

1-（1）金額別集計表（円入金）

（単位:円）

募金額	人数	入金額
1,000,000	3	3,000,000
500,000	1	500,000
300,000	1	300,000
200,000	3	600,000
150,000	1	150,000
130,000	2	260,000
120,000	1	120,000
110,000	1	110,000
100,000	51	5,100,000
90,000	2	180,000
80,000	1	80,000
70,000	1	70,000
60,000	10	600,000
57,040	1	57,040
50,000	66	3,300,000
40,000	29	1,160,000
35,000	1	35,000
30,000	114	3,420,000
25,000	5	125,000
20,000	277	5,540,000
18,000	1	18,000
15,000	11	165,000
13,000	2	26,000
12,000	2	24,000
10,100	1	10,100
10,000	523	5,230,000
10,000未満	60	284,000
合計	1171	30,464,140

1-（2）同窓会別集計表（円入金）

（単位:円）

同窓会名	人数	入金額
北海道	34	1,974,000
東　北	36	841,000
東　京	668	17,583,100
北　陸	24	345,000
中　部	63	1,078,000
京　滋	71	1,785,000
大　阪	107	2,438,000
中　国	33	740,000
四　国	25	490,000
九　州	58	1,405,000
沖　縄	42	1,593,000
海　外	10	192,040
合　計	1171	30,464,140

2　金額別集計表（ドル入金分）

（単位:米ドル）

募金額	人数	入金額	円換算	
1,000	1	1,000	119,690	*
500	1	500	57,375	**
30	1	30	3,442	**
150	1	150	17,164	***
100	1	100	11,443	***
100	1	100	11,573	****
100	1	100	10,386	*****
合　計	7	1,980	231,073	

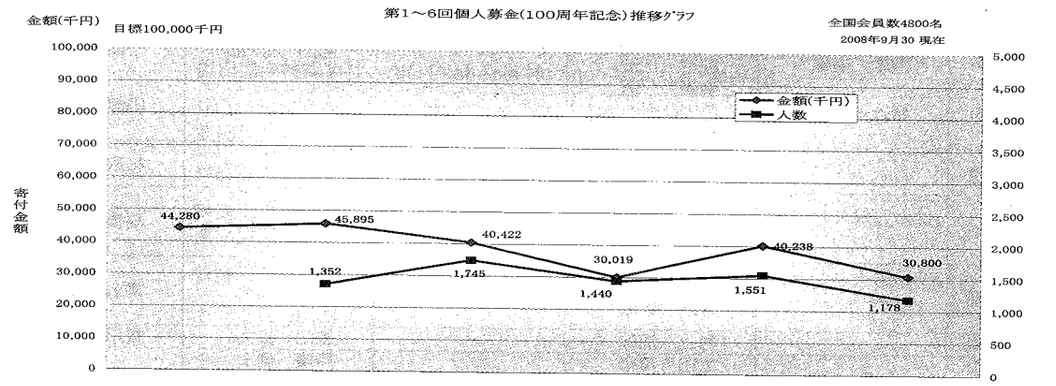
* ex.@¥119.69/$
** ex.@¥114.75/$
*** ex.@¥114.73/$
**** ex.@¥115.73/$
***** ex.@¥103.86/$

3. 募金報告会参加費（6/5）

（単位:円）

入金額
105,000

1.	1171	30,464,140
2.	7	231,073
3.	1	105,000
入金合計	1178	30,800,213



日米教育交流振興財団の状況
（フルブライト記念財団）

1.募金活動

（単位：千円）

冠名	2006年度	2007年度	2008年度
ＹＫＫ	10,000※2	10,000※2	10,000※2
三菱グループ	5,000※2	5,000※2	0
トヨタ自動車	10,000※2	15,000※2	5,000※2
日本航空	2,063※1	0	0
100周年記念	35,374※2	54,560※2	28,994※2（目標）
東京チャリティゴルフ	7,058	4,710	5,000
個人募金	14,577※3	30,249※3	5,377※3
合　計	84,072	119,519	49,371（目標）

※1　航空券による寄付
※2　100周年記念企業・団体募金（企業・団体名12頁ご参照）
※3　100周年記念第6回個人募金（ご寄付者名13～14頁ご参照）

2. 下記ホーム・ページにより、次の資料がご覧になれます。

http://www.fulbright.or.jp

① 寄付行為
② 役員名簿
③ 2008年度事業報告書
④ 2008年度収支計算書
⑤ 2008年度正味財産増減計算書
⑥ 2008年3月31日現在貸借対照表
⑦ 2008年3月31日現在財産目録
⑧ 2008年度事業計画書
⑨ 2008年度収支予算書

3. 地区別役員等名簿

2006／2009年役員等の名簿は次の通りです。

2006/2009年日米教育交流振興財団・地区別役員等　（敬称略）

地　区	顧　問（4）	理　事（25）	監　事（3）	評議員（22）	審査委員（11）
北海道		有江　幹男	高向　　巌	熊本　信夫 小柳　知彦 関口　恭毅	曾野　和明
東　北		青木　茂之 仁科　雄一郎		高橋　剛夫 吉川　清隆 佐々木　肇	佐々木　公明
東　京	最高顧問 大河原　良雄 渡邊　　宏	理事長 賀来　景英 副理事長 原田　敬美 内古閑　俊二 佐藤　満秋 飯野　正子 金田　　新 石原　直紀 藤田　幸雄	舟橋　定之	太田　隆次 早川　与志子 長坂　健二郎 和田　昭穂	審査委員長 五十嵐　武士 印南　一路
中　部		木下　宗七		千田　純一 上田　慶一	藤本　　博
京　滋	最高顧問 岡本　道雄	川又　良也 細谷　正宏		岩山　太次郎	千葉　哲郎
大　阪	金辻　信弘	清澤　　悟 牧野　信夫 松田　　武		大津留　智恵子	山藤　　泰
中　国		木村　榮一 大津　　章			祐宗　省三
九　州		稲垣　良典 今里　　滋	吉村　徳重	林　　弘子 落合　太郎 西田　昭彦	高橋　　勤
沖　縄		比嘉　幹郎 東江　康治		川満　　敏 尚　　弘子 石川　博三	瀬名波　栄喜
北　陸		村上　清敏		森田　幸夫	橋爪　祐美
四　国		太田　英章		戸澤　健次	

2008年度財団奨学生冠名リスト

採用者数：Fulbright Fellows（Recent B.A.）…FF　8名
Graduate Research Fellows（Graduate Students）…GRF　4名
Graduate Students - Japanese…GSJ　3名

冠　名（敬称略）	奨　学　生　名	カテゴリー	受入大学名	出身大学（最終）名
＜Americans＞				
1. 三上基金	FOSTER, Drew M.	FF	広島大学（社会学）	Colorado Coll.（Sociology）
2. 三上基金	HAYWOOD, Colin H.	FF	中部大学（日本文学）	Earlham Coll.（Japanese Studies/English）
3. 三菱グループ	LEACH, Daniel S.	FF	筑波大学（電機工学）	Ohio U.（Electrical Engineering）
4. トヨタ自動車	NIX, David G.	FF	東北大学（建築デザイン）	Wake Forest U.（Studio Art）
5. YKK	SCHLACHET, Joshua E.	FF	鹿児島大学（日本史）	Cornell U.（History & Asian Studies）
6. TFA（F100-6）	SHORR, Daniel J.	FF	京都大学（心理学）	Georgia Institute Tech.（Phychology）
7. 志野基金	SOLOMON, Joshua L.	FF	弘前大学（音楽学）	Urshinus Coll.（East Asian Studies）
8. デンソー	STELTZER, Andrew G.	FF	金沢大学（アジア研究、政治学・法学研究）	Bowdoin Coll.（Asian Studies/Gov't & Legal.stds）
9. TFA（F100-7）	MCDONALD, Kate	GRF	京都大学（歴史）	U.C. San Diego（History）
10. TFA（F100-8）	RICHARDS, Misty C.	GRF	国立精神・神経センター神経研究所（健康科学）	Cornell U.（Medicine）
11. TFA（F100-9）	SAYRE, Ryan	GRF	東京大学（人類学）	Yale U.（Anthropology）
12. TFA（F100-10）	ZIOMEK, Kirsten L.	GRF	東京大学（日本史）	U.C. Santa Barbara（Modern Japanese History）
＜Japanese＞				
1. TFA（F100-11）	三重綾子	GSJ	UC Berkley（Journalism）	立教大学（法学）
2. ジブラルタ生命	森いづみ	GSJ	Penn. State U（Education）	東京大学（教育学）
3. YKK	徳永智子	GSJ	U. of Maryland Coll.Park（Education）	東京大学（教育学）

	寄付企業・個人名（敬称略）
F100（6）	プロクター・アンド・ギャンブル・ジャパン株式会社、株式会社豊田自動織機、豊田通商株式会社、AIG East Asia Hodings Management KK.
F100（7）	住友化学株式会社、大日本インキ化学工業株式会社、三井化学株式会社、武田薬品工業株式会社
F100（8）	株式会社読売新聞東京本社、株式会社日本経済新聞社
F100（9）	株式会社商船三井、富士通株式会社、日本公認会計士協会、大阪ガス株式会社、清水建設株式会社
F100（10）	日野自動車株式会社、株式会社日立製作所、株式会社朝日新聞社、日本電気株式会社
F100（11）	トヨタ自動車株式会社

ガリオア・フルブライト同窓会の活動

ガリオア・フルブライト京滋同窓会 2008年総会と歓迎会

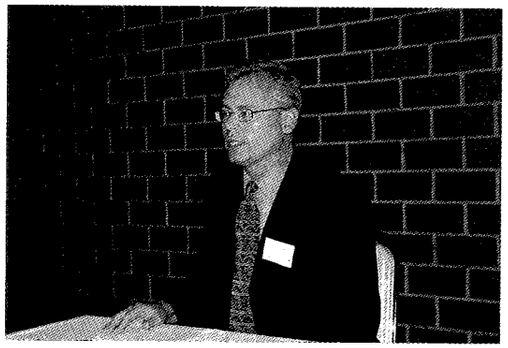
岩山 太次郎（会長）
1960 Kenyon C.

さる10月26日(日)夕刻5時より、京大会館で、2008年度総会と2008年度アメリカン・グランティー歓迎会を開催した。

総会は、例年通り過年度の事業報告と会計報告、本年度の事業計画案、予算案を審議し、これを承認した。

多くの会員からの強い要望があり、昨年度決定した、15年ぶりの会員名簿の刊行は、個人情報保護に関する法律の施行後のことであり、名前の記載や記載項目のアンケート調査などしているうちに、予想以上の日時を要し、総会当日にやっと間にあわすことできた。会員でありながら名簿刊行に同意の返事をしてこられなかった方々はお名前すら名簿に掲載できなかったことや掲載項目の一部に不同意の方々あった等々、随分不完全で不揃いな名簿になってしまった。会員数の維持、増加の観点からも、全会員名を記載した名簿を刊行できるように、今後改善していかなければと思っている。

本年度は京都・滋賀地区へは、レクチュアラーとグラジュエイト・フェローが1名づつ、フェローが2名、計4名を迎えている。レクチュアラーのウェスターン・ミシガン大学のウィルソン・ウォーレン教授は同志社大学大学院アメリカ研究科へ派遣されている先生で、専攻分野はアメリカン・スタディーであり、特に「アメリカ労働者階級の歴史と法律と社会」を専門にされている方であるので、大統領選挙について講演をお願いした。過去の大統領選挙と今年の大統領選挙では、労働者階級（それに宗教グループやエスニシティ）の動向がどのように違うかを歴史学者らしく講演してくださった。久しぶりに留学時代に戻った気分になって、講演に聴きいった。



歓迎会は4名のフルブライターに加えて、ウォーレンさんのご夫人と3人お子さんもまじえて、ビュッフェをともにしながら、楽しいなごやかな集いであった。開催中の正倉院展の会場の奈良は近くなので是非見学すべきである、「正倉院展を見ずして日本の過去を語るべからず」と言って、諺教育に薀蓄をかたむける会員もあった。また、会員のお一人にヴァイオリニストがおられ、講師のお子さんの一人はその方からヴァイオリン・レッスンのアレンジメントに成功したという予想外の成果もあった。1時間半ほどの歓迎会であったが、会話ははずみ、所期の目的は達せられたのではないかと思っている。

ジャーナリスト部門懇親会

松尾 秀助
1970 American U.

今年5月23日、久々に東京在住のジャーナリスト部門同窓会を内幸町・日本記者クラブで開きました。以前はかなり熱心に懇親会を行っていたのですが、皆さん忙しく、しだいに間が空いてしまったわけです。4月の東京フルブライト・アソシエーション総会に出てきた女性陣が盛り上がって、「久しぶりにやろうよ」ということになり、急遽、連絡して1ヵ月後に開催となりました。会場は千野境子さん（産経新聞論説委員）が予約してくれました。

まことに急ごしらえの会でしたが、15人の同窓生と3人のアメリカン・グランティー、さらにJUSECの岩田瑞穂さんと伊藤智章さんも参加してくれて、結構にぎやかな会になりました。

1977年から2005年まで、世代的にもバラエティーのある顔ぶれが揃い、面白い雰囲気でした。やはり現役ジャーナリストを卒業して大学の先生になっている方が多く、竹内葵さん（聖心女子大学）、小中陽太郎さん（名古屋経済大学）、早川与志子さん（明治大学）、石澤靖治さん（学習院女子大学）などが出席されました。

アメリカン・グランティーの3人もそれぞれにユニーク。トム・ハーさんは写真家でハワイ在住。ジェイミー・ブリシックさんはフリーランスのジャーナリストです。ロバート・ランドさんはやはりフリーランスで、いまは青山学院大学に籍を置いて研究中とか。

残念なのは、ご連絡を差し上げた中に、「もう90歳で歩行困難なので無理」とか、「リハビリ中なので、名簿から削除してほしい」、なかには「主人は○年に亡くなりました」といったご返事をいただいた方もおられたことです。加齢のためで、やむをえないのですが、明日はわが身、心して過ごさなければならないと感じました。

今回は所用で出席できないが、次回は必ず、と言ってくださる方もたくさんいて、年に1度はやったほうがいいと話し合い、幹事役も順番に、ということで、にぎやかに散会しました。

建築・土木・都市・環境分野同窓会報告

村上 暁信
2001 Harvard U.

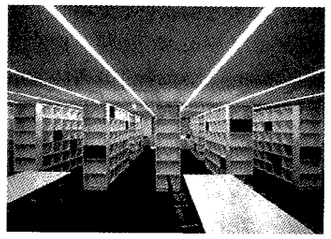
フルブライト建築・土木・都市・環境分野同窓会が2008年3月19日(水)に開催されました。当日は生憎の冷たい雨にもかかわらず、32名の関係者にご参加戴き、盛会となりました。フルブライト事務局からも、デビッド・サターホワイト事務局長、岩田瑞穂フルブライト交流室マネージャーが参加して下さいました。さらに、開催時に来日されていたフルブライトアジア地域担当のウィリアム・ベイト局長と、日本に滞在中のグランティお二人も参加して下さいました。

会場となったセルバンテス文化センター東京は、同窓生の渡邊健介さん（1998年）が設計をされた建物で、今回は同窓会の開催、食事の手配など全てに関して、渡邊さんとセルバンテス文化センター東京のスタッフの皆さんに大変なご尽力を戴きました。会では本同窓会のアドバイザーでもある原田敬美氏（1974年）から乾杯の挨拶を戴いた後に、ウィリアム・ベイト局長からフルブライト交流の最近の動向や日本に関する思い出を披露戴きました。またサターホワイト事務局長からは日本の交流事業などについてお話戴き、さらに当日の会場、食事、ワインについて称賛の御言葉を戴きました。

しばし歓談した後には、渡邊さんから、会場となった建物の設計について、スライドを使って紹介をして戴きました。渡邊さんは、建物全体の改修だけでなく、家具やサインまで手がけられたとのことで、設計の意図や実際の建設時の難しかった点などについて楽しくお話し戴きました。その後、全員でロビー、オーディトリアム、ギャラリー、図書館、教室群など各所を回り、説明を受けつつ見学をしました。途中、現場での細かい設えや、材料選定の理由といった専門的な質問も出るなど、活発なやり取りがなされました。

会場に戻ってからは、またワインを飲みながらの議論が止まることなく続きました。本会には、現在建築や都市計画関連業界の第一線で活躍されている方々が多くおられ、貴重なお話を伺える場となりました。来日中のグランティお二人にとっても、日本の建築を実際に見学して、関係者と話をするいい機会になったのではないかと思っています。また会員には、大学教員も多くおられまして、今回の会では、会員の教え子でアメリカ留学に関心がある学生さんも参加して下さいました。彼らにとっても一線で活躍する建築家や都市計画家と話ができる貴重な機会になったものと思います。比較的若い同窓生は、留学時にお世話になった岩田さんを囲んで、思い出話と一緒に留学希望の学生に留学を指南するなど、同窓会の利点が発揮されていました。

今後ともこのような繋がりが生まれる場として、本会を継続していければと考えています。建築、都市、環境に関心をお持ちの同窓生がおられましたら是非ご一報戴き、次の同窓会にご参加戴ければと思っております。また、同窓会は年に1回程度の開催を計画していますが、ここ数年は同窓生が設計や保存などに関わった建物や場所を会場にしています。現在の仕事や留学時の専攻が全く異なっていても、建物や都市に関心がある方は是非ご参加戴ければと考えております。（連絡先：現幹事・村上暁信・murakami@sk.tsukuba.ac.jp）



渡邊健介さん設計のセルバンテス文化センター東京の図書館

第33回日米交流チャリティ・ゴルフ大会

外池 滋生　ホスピタリティ委員　1990 M.I.T.

今年も恒例の日米チャリティゴルフ大会が戸塚カントリー倶楽部で、10月20日月曜日に行われた。一週間前からの曇り時々雨の天気予報見事はずれて、当日は快晴で、プレー中には少し汗ばむ襟元を冷やしてくれる程度のさわやかな微風で、これ以上望むべくもないゴルフ日和であった。

戸塚カントリー倶楽部に到着すると、長坂同窓会長自らのお出迎えいただき恐縮した。

例年は150名程度の参加者があるところ今回は120名程度の参加であった。これは米国に端を発した金融危機が影響したのではないかと思われる。むしろ実行委員会の努力のお陰で120人の参加を得たと感謝すべきであろう。

ということで絶好のゴルフ日和のなか、西と東に別れてスタートして3時過ぎには全員無事にプレーを終えた。今回は特別ゲストとして全米女子プロの人気者のPaula Creamerさんが19番ホールで待ち構えていてプレーを終わった参加者と歓談し、その後パッティンググリーンで、パットの打ち方についての質問に答えて、実演をしてくれるという思わぬおまけがついていた。パットの腕前に全員が驚嘆したのは当然であるが、（ここに詳説する余裕はないが）普段の練習のしかた、ラウンドの前の練習のしかたなどについて参加者が各人各様に大変参考になるヒントを得た。

3時45分から予定通りレセプションがトーナメントディレクターのDavid Satterwhiteさんの司会で始まった。実行委員長の伊東信一郎さんの挨拶で始まり、実行委員会の紹介、来賓のPaula Creamerさんの（「いずれは自分も寄付をしたい」という内容も含んだ）挨拶、駐日米国大使の挨拶の代読に続き、長坂健二郎会長から、このチャリティ・ゴルフがフルブライト奨学生のための予算の増額を日米両政府に働きかける上で極めて重要な働きをしていて、今回もその成果が上がっている旨の報告の後、日米交流振興財団の原田敬美副理事長へ600万円の目録が贈呈され、原田副理事長からお礼の挨拶があった。

その後スペシャルスポンサーや、商品寄贈者、戸塚カントリー倶楽部スタッフなどの方々の紹介に続き、チャリティー・オークションに移った。ANA

のロンドンまたはパリまでの往復ビジネス切符が90万円で、American航空の米国往復ビジネス切符が102万円で競り落とされ、最後のUnited航空の米国往復ビジネス切符は、途中でインターコンティネンタルホテル（のスイーツ？）2泊が追加され、ついにはビジネスがファーストクラスに格上げという逆セリが入って、149万円で落札され、最新ベンツの試乗券は司会のSatterwhiteさんが4万円で落札された。

そしてついに待ちにまった成績発表となり、内閣総理大臣カップを東コース1位の平間日出朗さんが、駐日米国大使盾を西コース1位の安西雄丈さんがそれぞれ獲得され、その後順次10位までの入賞者の発表が行われた。

そうこうして和やかに歓談するうちに、日がかげって来て、お開きとなり、再会を約して解散した。階下に下りるとそこでは長坂会長が見送りの挨拶や後片付けの指示をしておられるのが目に入った。早朝から最後までこうして気を配ってくださっていることに改めて感謝の気持ちをいだきながら、帰途についた。

ホスピタリティ委員会各種イベントの報告

2008年度 アメリカン・ニュー・グランティー歓迎会

2008年11月7日　午後6時～8時
サンケイプラザにて

東京フルブライト・アソシエーションの会員、家族など計53人が今年のニュー・グランティーを歓迎した。島田道子・ホスピタリティー委員長の司会で、まず歓迎挨拶にアソシエーションの佐藤ギン子副委員長が立った(長坂委員長は出張中)。1963年にフルブライターとしてコーネル大学に留学した当時のことに始まり、外務省スタッフとしていかに日米の相互理解に腐心してきたかを語る。アソシエーションが果たして来た役割を強調し、オバマ新大統領の登場でさらに日米関係は緊密になるだろうと述べた。

乾杯の音頭は外務省広報文化交流部の松永文夫部長代理。ニュー・グランティーが日本理解をさらに深め、滞在をエンジョイできることを念願して杯を挙げた。島田さんが来賓を紹介。YKKの佐久間功氏、三菱金曜会の西村敏行氏、トヨタ自動車の瀬川秀雄氏、GEのローレンツ・ベイツ氏、パナマ大使館のリッター・ディアス氏などが挙手をして応えた。ディアス氏はフルブライターでもあったという。

食事、歓談の後、JUSECの交流部長・岩田瑞穂氏がグランティーを紹介し、一人一人壇上に上がって簡単に挨拶をした。客員講師として来日しているロジャー・ロビンス氏はアメリカ宗教学を東京大学で講じている。スティーブン・ギンゲリック氏は地質学の研究者で、関東平野の下を流れる地下水などについて筑波で研究中。

グラデュエイト・リサーチ・フェローの紹介がつづく。ゲリー・モリス氏は、中国の大気汚染が日本にどのような影響を与えているかを調べている。ダニエル・サリヴァン氏は早稲田大学で日本の明治大正期を研究している。エリカ・ニシザト氏はデザイン研究者らしく、日本女性が「かわいい」と言う現象をファッション心理学的に究める。セレステ・エーリントン氏は日韓の政治的被害者団体の状況を調べている。キアステン・ジオメック氏のテーマは戦時中の日本の植民地政策と、台湾や日本の先住民族。アイヌ問題に取り組んでいる。ニキル・カプール氏は60年安保騒動の社会的影響を早稲田大学を拠点に調査。スーザン・フルカワ氏は「太閤記」における豊臣秀吉の研究という興味深いテーマ。リリー・アン・ウェルティー氏は第二次世界大戦後の日米ハーフの子供を追跡している。

フルブライト・フェローとして来日中の三人も紹介された。ダニエル・リーチ氏は筑波大学でロボットを研究。ユーリー・シュワルツバーグ氏もコンピューター・インターフェースについて筑波大学で学んでいる。デービッド・アダモビッチ氏は公衆衛生が専門で、愛媛大学で日本の医療制度などを研究。英語以外に日本語、フランス語も堪能というマルチ・タレントだ。

当日欠席のグランティーもいたが、総勢15人、それにホスト・ファミリーも交えて、にぎやかな歓談となった。

さて、一段落したところで、本日のアトラクションへと進む。まずは岡本慶子さんの "Let's Wear a Kimono" というレクチャー。慶子さんは後につづく手品の岡本文雄氏のお嬢さん。東京女子美大で染織を学び、卒業後2年間、京都の友禅作家の元で修業した。東京に戻り、デザイナー兼営業として洋装業界に入り、2001年から2004年までオハイオ州立大学に留学。帰国後、香港の衣料品会社の東京支店に2年間勤め、さらにイオンに移った。

干支の動物たちをイラストに使って、キモノを制作するプロセスをスライドで説明する。まず糸を紡ぎ、染め、機織にかけ、布からキモノになる過程が分かりやすく示される。できた作品が店で売られ、それを老若男女が正月の晴れ着として身につけて町に出る。イラストレーションは慶子さんの友人で、オハイオ・コロンバス在住。慶子さんの文章とこのイラストレーションで本にしようとしているが、なかなか刊行の運びにならないという。会場に展示されたイラストをみな興味深そうに見ていた。

さあ、次は父上・岡本文雄氏のマジック。1957年、オレゴン州立大学というフルブライターだ。白い花を赤くする。ピンクのハンカチをグリーンに。電球をこすった腕や額につけるとパッと点く。だんだん難しいマジックになり、長い紐を岡本氏の首に巻きつけ、若者二人にワン・ツー・スリーで思い切り引っ張らせる。危うし！と思うと、紐はハラリとクビを離れて一本に、となってパチパチと大拍手。最後に金盥に入れた新聞紙に火をつけ、蓋をする。パッと開けると、人形と万国旗につながった「Welcome,

American New Grantees」という横断幕が出て、大団円。そのすばらしさにみな驚嘆した。

時間となって、原田敬美・日米教育交流振興財団副理事長が「中締め」。日本式に三、三、三、一の手拍子 を伝授。見事、一発で決めて散会となった。

国会・最高裁判所の見学

太田 啓子
（大倉健太郎氏夫人
大倉氏は1996 U. of Wisconsin-Madison）

5月27日、フルブライトアソシエーションのホスピタリティ委員会活動として企画された、国会・最高裁判所見学に同行する機会を頂いた。

私自身はフルブライト留学経験は無いのだが（夫がフルブライトにお世話になって留学した）、国会見学は小学校の社会科見学以来だし、私は弁護士なのだが最高裁に行く機会は今まで無かったしおそらく今後も無いだろうし（ほとんどの弁護士は最高裁で弁論をする機会など無いのだ）ということで、楽しみに参加させて頂いた。

参加者のフルブライト・グランティの専門分野は日本史、日本文学から都市計画まで多様で、幅広い興味関心をお持ちのようだった。ひと組、お子さんを含めたご家族連れもいらして和やかな道中だった。

午前10時に日米教育委員会に集合し、タクシーに分乗してまずは国会に向かった。ここではフルブライト同窓生の津島雄二議員（自由民主党）が30分程度応接の時間をとって下さり、国会の仕組みについて簡単に説明した後、質疑応答の時間が設けられた。津島議員は大蔵省（現財務省）出身で、入省後1955年にシラキュウス大学に留学されたという。津島議員といえば自民党の税制調査会長などの重役もお務めになっている大物議員だが、大変気さくな雰囲気で、英語でのご挨拶やお話も堂々たる流暢なものだった。途中軽く足を組んでお話しになり、それはおそらく日本人相手の日本語のご挨拶の中では見られないものだったのだろうが、アメリカからの留学生を迎えてのスピーチというその場にはかえってふさわしい雰囲気で、いかにも物慣れた様子だったのが印象的だった。

質疑の際グランティからは、当時世論の批判が高まっていた後期高齢者医療制度や、いわゆるねじれ国会における議会運営に関するものなど、よく時事を捉えた質問がなされ、津島議員は軽く冗談を交えながらわかりやすく説明して下さり、有能そうな秘書の女性が次の予定を促すまで、あっと言う間に時

間が経った。

その後国会の建物内をまわり、天皇陛下の御休所や中央玄関にある伊藤博文、板垣退助らの銅像などを見学した。

それで午前の予定は終わり、いったん日米教育委員会に戻って昼食をとったあと、今度は最高裁判所に向かった。最高裁には15名の裁判官がおり、その1人である泉徳治裁判官が対応して下さった。泉裁判官は1963年に裁判官になり、1970年にハーバードのロースクールに留学され、2002年に最高裁判事に就任されたたとのことだった。大変穏やかで温厚な印象の語り口で、日本の司法制度の特徴などを説明して下さった後、質疑の機会があった。グランティから出た質問の中で私にとって印象的だったのは、「アメリカでは連邦裁判所の裁判官が新しく就任すると、どのような人物で、どのような信条の持ち主なのかということが話題になるが、日本で新しく最高裁判所の裁判官が就任したら、その裁判官がどのような人物か（政治的傾向など）が社会で話題になるか」というものだった。泉裁判官は、「いや、そのようなことはないですね」とお答えになっており、私もそうだと思った。そのような質問が出ること自体を新鮮に感じるほど、日本では最高裁判所裁判官というのは一般市民にとっては縁遠く感じられる存在であろう。また私が司法業界の末席にいる中で感じることだが、特定の裁判官の政治的信条傾向があると市民に感じさせるような裁判は避けなければならないという空気があると思う（実際には個々の裁判官の内心には様々な政治的信条があったとしても）。アメリカの司法をめぐる空気と日本の司法をめぐる空気はかなり異なるのということを感じさせた質疑だった。泉裁判官は、日本の司法の特質を興味深く捉えている本として、ダニエル・フットの「名もない顔もない司法」という著作を紹介していた。

また、最高裁裁判官に女性は何名いるかという質問があり、泉裁判官は、現在は1人（行政官出身）だが、それは以前は法曹全体に占める女性の割合が少なかったことが大きな理由であること、現在は女性法曹が増えているので今後は女性裁判官も更に増えるだろうとお話しになっていた。「週末など仕事が休みの日は何をして過ごしているのか」という、裁判官の素顔に迫る質問もあったが、これには泉裁判官は「休みの日も仕事をしていますね」と穏やかにお答えになっており、激務をうかがわせた。最高裁裁判官が扱う事件量はすさまじく膨大とのことだった。「愛読書は何ですか」との質問に対しては「司馬遼太郎が好きです」とのことだった。

最高裁では、職員の方の案内で裁判の仕組みの解説ビデオを見せて頂いたり、泉裁判官の執務室にお邪魔するという機会も頂き、大変貴重な経験だった。

半日ずつではあるが国会・最高裁判所見学は色々と興味深いもので、グランティにも、日米の相違や日本の特徴をより深く感じる何らかの端緒が得られたのではないかと思った。

日光・宇都宮旅行（7月19日～21日）

山田 真之　ホスピタリティ委員会副委員長
1976 Georgetown U.

海の日を入れた3連休。北は仙台、南は沖縄よりフルブライト留学生11名とその家族等合計15名が出席。JR宇都宮駅にて、国際文化交流のボランティア組織「いっくら」の長門会長以下数名のメンバーによる出迎えを受け、バスにて宇都宮市「国際交流プラザ」到着。

宇都宮市の国際交流関係者及び十数名のボランティアの方々にフルブライト留学生の紹介後、宇都宮市長に代わり「国際交流プラザ」中田所長よりフルブライト留学生に「宇都宮市名誉市民証書」が手渡された。ボランティアの人々手作りの日本料理によるウェルカム・ランチョンをも楽しんだ。

その後、裏千家茶道教授斉藤宗琢氏の自宅を訪問。本格的な和風建築の茶室で茶道の歴史、重要な作法等ユーモアも交えながらの話。一人ひとりが実際にお手前を経験。興味を覚えた為か、多くのフルブラ

イト留学生がかなり長時間の畳の上での正座にも耐えていたのには驚いた。

バスにて栃木県青年会館「コンセーレ」着。宇都宮市民ボランティアの方々の自宅でのホームステイが予定されており、受け入れ家族の方々に出迎えて戴き、各家庭に出発。

翌朝、ホームステイをさせて戴いた家族の方々に伴われて集合。バスにて益子市に向かう。浜田家にて人間国宝浜田庄司作益子焼きの逸品を鑑賞。その後、隣接する研修センターにて指導員の指導を受け、カップ、皿等独自の工夫を凝らした“益子焼”の制作。絵付けも行った。各々の制作物を抱え、旅行の良い思い出が出来たと喜んでいた。

「鎌倉」にて日本そばを賞味の後、バスにて移動。江戸時代から続く藍染の「日下田紺屋」を訪問。9代目で重要文化財保持者日下田正氏による藍染に関する懇切な説明を受け、作業場等細部に渡り見学。その後世界各地の藍染の歴史等色々な角度からの質疑応答に花が咲いた。バスにて「コンセーレ」に到着。再びホームステイ先の方々に出迎えて戴き各々の家庭に分散。

翌朝「コンセーレ」に集合。お世話になったホームステイ先の方々との別れを惜しむ光景。バスにていろは坂を経て華厳の滝に到着。あいにく霧が発生し滝の音を聞くだけとなったが、龍頭の滝に着いたころには霧も晴れ渡っていた。

昼休みにお好み焼きが選ばれ、留学生も自分で上手に焼いて会話も弾んだ。その後バスにて日光東照宮に到着。夏休みに入った後の祝日だった事もあり、多くの観光客に交じり見学。世界遺産となった日光の建造物、自然の素晴らしさを満喫していた。

今回の日光・宇都宮旅行を通して、茶道、陶器、染物等日本文化の理解、外国人にも有名な日光参観、ホームステイ等を通じた地元の人たちとの交流・相互理解の促進、更にフルブライト留学生が3日間共に過ごせた事で、フルブライト留学生間での研究関連情報の交換も出来た事等も合わせ、多くのフルブライト留学生から旅行への参加の意義は大きかった

との声があった。通訳を始め色々な面でご支援戴いたボランティアの皆様に感謝申し上げたい。

秋の鎌倉を歩く会

松尾秀助

1977 American U.

JR横須賀線・北鎌倉駅は大混雑。11月23日の勤労感謝の日。雲ひとつない快晴無風。絶好の鎌倉散策日和に恵まれはしたものの、恵んでもらったのはわれわれだけではなく、善男善女すべてに与えられたために、鎌倉中は人人人でごった返した。事務局長の大野さんが大きくプリントアウトした「東京フルブライト・アソシエーション」のカードを駅前で掲げ、ホスピタリティー委員長の島田さんが踏み切りのところで張っている。

6人のニュー・グランティーと同窓会・家族を含め総勢23人が揃って、午後1時15分に出発。緑の小旗を先頭に、まずは円覚寺へ。「鎌倉五山の第二」とされる臨済宗禅寺。二度の蒙古軍襲来という国難に耐えた時の執権・北条時宗が両軍死者の菩提を弔い、禅道を広めるために建立した。

「おお、山門も仏殿もとてもシンプルですね。京都のお寺と少し違います」「ノー・カラー、ノン・デコラティブ。それはゼンと関係ありますか？」――鋭い質問がグランティーからとぶ。少し紅葉しかかった樹葉の陰に国宝・舎利殿が沈思してたたずむ。

車と人波に埋まる線路際の道を行く。明月院に寄る予定だったが、この混雑を考えて割愛。まっすぐ建長寺へ。「鎌倉五山の第一」、おなじく臨済宗の建長寺派大本山だ。鎌倉幕府第五代執権・北条時頼が建立したわが国最初の禅寺。750年前に鋳造された国宝の梵鐘、樹齢760年の柏槇（びゃくしん）にみんな、「すごーい！」。特別公開中の重要文化財・法堂（はっとう）の天井に雲龍図がある。創建750年を記念して小泉惇作画伯が描いたもので、見上げる者に法雨をそそぎ、仏法の恵みを与えるという。みんなこぞって見上げたから、いいことがあるだろう。

「けんちん汁という日本古来のミソスープがあるけど、あれはこの建長寺が発祥なんですよ」などとそれぞれの知識を伝授。

総門で人数を確認すると、二人足りない。ははあ、リリーアンとエリカがどこかでつっかかっているな。ケータイにメッセージを残してお先に。巨福呂坂を下って一路、八幡宮を目指す。すごい人出で、食事処はどこも長蛇の列。

西門の石段を上がると、雑踏はますます激しく、まるで初詣のような混み具合だ。七五三の子供たちももみくちゃにされて泣きべそ。本宮の参拝をしていると、またばらけて行方不明者が出ること必定。緑の小旗が振られて、東側の石段を下ることにする。舞殿では古式ゆかしい結婚式が執り行われていた。雅楽演奏、玉ぐし奉納、三々九度の盃など、とくにグランティーには思わぬ見ものになった。「シズカさんじゃないのね」という知識派から、「いくらぐらいかかるのかな」という現実派まで、いろいろ。行方不明だったお二人さんもニコニコと現れた。

大鳥居をくぐって、小町通りへ。いやはや、ここも上野アメ横さながらの大混雑。お土産を買ったりしながら、4時半、予定より少し早めに「和民」に入る。まず、ビールで「カンパーイ！」。鍋などをつつきながら、和気あいあいの歓談となる。「太閤記」などを研究しているスーザンは秀吉や頼朝に詳しい。

「秀吉は頼朝の真似をしていたところがある」と言う。初めて聞いた説だが、面白い。そういえば、二人とも浮気性で、ばれては怖いカミさんに平謝りしていた。二人の活躍期は三世紀ほど隔たっているが、秀吉が鎌倉を訪ねたとき、頼朝の絵像を見て、その肩をぽんぽんと叩いて言ったそうだ。「およそ日本広しといえども、底辺からのし上がって天下をとったのは、あんたとわしだけだ。いわば天下友達というべきだな」

鎌倉散策の一日の疲れは、飲み放題のアルコールに癒されて、互いにケータイの愛児の写真を見せあい、ふるさと自慢をしあい、再会を約して、無事解散となった。

世界フルブライト・アソシエーション沿革

1982	日本のフルブライト・プログラムの30周年を機に全国9地区（北海道・東北・東京・中部・京都/滋賀・大阪・中国・九州・沖縄）に、ガリオア（1949～51）を含めたガリオア・フルブライト同窓会を各地区ごとに結成
	同窓生を対象に、主に米国人招聘の目的で第一回個人募金を展開し、4,400万円余りの寄付金が集まる。またその一環として日米交流チャリティー・ゴルフ大会も始まる。
	フルブライト上院議員を招き、記念の昼食会
1983	経済団体・企業を対象とする募金開始
	同窓会募金をもとにした奨学金による留学生受け入れ始まる。
1986	(財)日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）設立
1987	第二回個人募金により、4,600万円余りの寄付金が集まる。
1988	東京同窓会・懇親会（4/20）に、皇太子殿下（天皇）・妃殿下（皇后）がご臨席された。
	北陸同窓会が結成される。
1990	フルブライト上院議員来日、『フルブライト夫妻歓迎会』を開催した。
	東京同窓会主催で、新着米国人フルブライターの歓迎レセプションに、高円宮殿下・妃殿下がご臨席された。
1991	ニューヨークに『日米ガリオア・フルブライト同窓会』が結成される。
1992	日本のフルブライト・プログラムの40周年を記念し、日米教育委員会、ガリオア・フルブライト同窓会、フルブライト記念財団の共催により、アメリカ再発見旅行、全国大会（9/18、天皇皇后ご臨席）、フルブライト賞授与、記念品販売、フルブライト記念音楽祭（10/13、皇太子殿下ご臨席）、記念出版などの行事が行われた。
	第三回個人募金により、4,000万円余りの寄付金が集まる。
1995	フルブライト上院議員逝去
1996	四国同窓会が結成される。
	世界のフルブライト・プログラムの50周年記念行事『アジア・シンポジュウム』を日米教育委員会が開催し、シンポジウムとレセプションへ皇太子殿下（天皇）・妃殿下（皇后）がご臨席された。
1997	第四回個人募金により、約3,000万円の寄付金が集まる。
1999	2002年のフルブライト・プログラム50周年に向けて『フルブライト公開講演シリーズ』を開始
	ガリオアプログラム50周年（1949～99）を祝い、『ガリオア50周年記念レセプション』を開く。
2001	第五回個人募金運動開始
2002	日米フルブライト・プログラム50周年を記念し、日米教育委員会、日米教育交流振興財団の共催により、記念切手発売(5/8)、フルブライト音楽祭5/9（木）、美術展示会（5/20-26）フルブライト公開講演シリーズ最終回（5/25）、レセプション（5/25、天皇・皇后両陛下ご臨席）、公開記念式典/フルブライト賞授与/シンポジウム（5/26皇太子・同妃殿下ご臨席）アメリカ再発見旅行（9/20-29、ボストン、ニューヨーク、ワシントンD.C.ほか）、記念品販売、記念出版などの行事が行われた。
	第五回個人募金により、4,000万円余りの寄付金が集まる。
2004	会則を一部変更し、名称を「東京フルブライト・アソシエーション」に改めた。(5/26)
2005	フルブライト上院議員生誕100周年記念行事として、ハリエット・フルブライト夫人が来日、東京（10/29）、京都（11/1）、大阪（11/2）で歓迎会を開催した。
2006	フルブライト生誕100周年記念演奏会を開催した。(2/4) 「フルブライト生誕100周年募金」発起人会を開催した。(6/6)
2007	「フルブライト生誕100周年記念企業・団体および第六回個人募金」を実施
2008	「フルブライト生誕100周年記念企業・団体募金」最終報告とお礼の会を開催した。(6/5)

ホストファミリー

2008年度は下記の希望者があり、現在調整中です。

No.	氏　名
1	箕浦　康子
2	小川　富由
3	早川　与志子
4	鈴木　淳一
5	宮崎　基則
6	堀江　昭

No.	Gender	Name	Home	Host Affiliation	Department
1	Ms.	WELTY, Lily Anne Yumi	U. of California, Santa Barbara	Shibaura Inst. of. Tech	Japanese History
2	Ms.	FLOYD, Nikki D.	Yale U.	Nihon U.	Japanese Literature
3	Mr.	LEACH, Daniel S.	Ohio U.	U. of Tsukuba	Computer & information Sci.
4	Mr.	COOPERSMITH, Jonathan C.	Texas A&M U.	Tokyo Inst. of Tech.	American History

日本フルブライトメモリアル基金（J-FMF）への協力

2008年度に訪日した、約400名の米国人小学校、中・高等学校教員のうち、関東地区の区市町を訪問した先生方の到着日に、夕食案内のボランティアに協力された会員数と、区市町長への表敬訪問に同行された会員（敬称略）は次の通りです。

6月10日(火) 夕食案内：　25名

6月16日(月) 表敬同行：

茨城県神栖市　太田 隆次（1967 U. of Wisconsin）

栃木県下野市　野見山 一生（1965 U. of Cincinnati）

東京都多摩市　鈴木 誠道（1961 U. of North Carolina）

千葉県香取市　内藤 豊（1966 U. of California, Los Angeles）

10月14日(火) 夕食案内　18名

10月20日(月) 表敬同行：

長野県飯田市　諏訪部 眞（1965 U. of Kansas）

セミナー（勉強会）報告

第13回セミナー
08年1月25日

「気候変動に、日本は立ち向かうことができるのか」

鮎川　ゆりか

WWWジャパン気候変動特別顧問
1995 Harvard, Kennedy Sch. Of Gov.

去年のノーベル平和賞が、気候変動関係者に与えられたということは、気候変動問題が、環境問題を超えて、人類全体にとって新たな脅威となっていて、これを解決することは「平和」への貢献になる、という意味。

IPCC（国連気候変動政府間パネル）の年次報告を元に、温暖化の科学、影響、緩和の概要を話し、今取り組まなければならない緊急性の高い問題であることを説明。

中でも、報告の中に、緩和シナリオが6つ示されたが、産業革命前に比べ、気温上昇を2℃未満に押さえることが、温暖化の影響を最小限にするために必要で、これを実現するには、シナリオの中でも「カテゴリーⅠ」を追求する必要がある。

つまり、2015年までに排出をピークにし、それ以降大幅に削減し、2050年には、全世界で2000年比、50-85%削減する、そして、先進国は2020年の中期目標として、90年レベルから25-40%削減する必要がある。

つまり、京都議定書（2008-2012年）以降、更なる大幅削減が必要だが、日本は、京都議定書目標である6%削減も危いといわれている状況。

それに対して、「京都議定書目標達成計画」が2007年度を通して見直されたが、抜本的な政策の導入は見送られ、自主行動計画を中心とした現行手法の延長線上での追加対策しか導入されず、きわめて不十分。日本には本当に削減余地はないのか。

日本は、産業部門からの排出が大きいが、それは産業部門で、石炭を大量に使っているからである。これをより炭素の少ない天然ガス、再生可能自然エネルギーへと燃料転換すれば、大幅削減余地が出てくる。また、工場も最も効率の良い工場をトップランナーと見立て、すべての工場をそこにあわせるように、投資をしていくことで、大幅削減余地が出てくる。

発電・熱部門で、再生可能自然エネルギーへの転換で、さらに大幅削減可能。

こうしたことを引き出すためには、CO_2排出に価格を付ける、キャップ＆トレード型の国内排出量取引、炭素税など経済的手法を導入することが最も効果的。

しかし日本では、日本経団連を中心とした産業界が、こうしたことに強く反対し、数量目標で大幅削減することに反対している。

そのため、2013年以降の国際的取組みについても、日本が数量目標を持つこと自体に反対し国際交渉の場で、非難を浴びている。

こうした日本を変えるためには、企業からその体質を変えていかなければならない。

イギリスのチャールズ皇太子がイニシアティブをとった「バリ・コミュニケ」、アメリカの主要企業がNGOなどとともに連携し、連邦政府に規制的手法の導入を求めた「USキャップ」などの動きが、海外の産業界では起きている。こうしたことを日本でも行えるようにならないと、温暖化防止でのリーダーシップを発揮することはできない。

第14回セミナー
08年3月25日

「日本政府の行政指導―過去25年間における変化」

アラン・スミス

在日米国商工会議所会頭、AIGイースト・アジアホールディングス・マネジメント株式会社ゼネラル・カウンセル
1982東京大学大学院：法学部研究生
（フルブライト奨学生）

日本の役所が25年前の外貨不足時代から徐々に世界の金融大国に変化してきた軌跡に沿って、生きた歴史の具現者としての体験を具体例を挙げながら話された。日本の役所もスミス氏には終始好意的な態度で接して、どちらかというと意外な感じを受けた。現在の最大の焦点であるCDS（Credit Default Swap）についても触れておられたが、鈍感な聞き手は7ヶ月後の今日の、この世紀の大金融恐慌の前触れも察知することができなかった。

第15回セミナー
08年11月14日

「米新政権の対中外交と日本の対応」

関山　健（たかし）

東京財団政策研究部研究員
（関山氏は、大蔵省や外務省で勤務ののち、香港大学修士課程、北京大学博士課程への留学を経て現職、東アジアの国際政治経済などを研究している。）

歴代大統領の対中政策パターン

ニクソンによる米中関係正常化後、多くの歴代米国大統領は、共和党か民主党かにかかわらず、就任直後は中国に対して強い姿勢をとる傾向が見て取れる。これは、「共産主義国家・中国」への強気な姿勢が大衆の支持を得やすいためだと考えられる。一方で、米国は少なからぬ政治経済上の利益を中国と共有するという現実から、歴代大統領は就任後おおむね2年以内には対中政策を軟化させてきた。

米国外交の展望

オバマ次期大統領は就任当初から抑制的な対中政策を取るのではないかと予想している。

世界を巻き込む金融危機と実体経済の悪化、ならびにアメリカ内の経済と財政赤字の累積という状況が、オバマ候補に勝利をもたらした要素であると同時に、新政権が真っ先に取り組まざるを得ない課題であり、それこそが新政権の外交政策を穏健な現実主義とプラグマティズムに引っ張っていく環境を作り出すことになるだろう。

米国はまず世界の金融秩序の回復と新しい安定的な構造を作りださなくてはいけないが、これは世界の主要経済国との協調ぬきにはできない課題である。同時に新政権は、イラクからの軍の撤退を進め、アフガニスタンでの治安改善を図り、イランと北朝鮮の核開発を断念させ、グルジア紛争以来悪化しているロシアとの関係改善も考えなくてはいけない。

したがって、今後の米国はマルチラテラリズム（多国間主義）による外交重視のアプローチをとっていくことにならざるをえない。

米中関係の現状と今後

さらに、中国との関係について見ても、いまや米国にとって中国は最大の貿易相手国となっており、歴代いずれの大統領就任時と比較しても一層重要なパートナーである。

また北朝鮮の非核化にも中国の協力は必要であり、ここにきてロシアが強硬な態度に変化してきていることからも、米国が中国を味方につけておく戦略的な必要性が高まっていると言えよう。

今後の米中関係を踏まえた日本の対応

オバマ次期大統領は、東アジアでは日米中の多国間の協力体制の構築を目指すと考えられるなか、日本は、臆することなく自国の利益の最大化を図るべきである。

戦後長らく、日本の外交政策は、米中関係のディペンデント・バリアブル（従属変数）であった。オバマ候補がチェンジ（変革）を訴えて大統領選に勝利したように、日本も、国際政治経済のなかでみずからをディペンデント・バリアブル（従属変数）からインディペンデント・バリアブル（独立変数）へとチェンジする千載一遇のチャンスが来ている。

世界フルブライト・アソシエーション第31回年次総会（於北京）報告

大野　熙　事務局長
1956 Northwestern U.

08年10月20日から22日、3日間行われました総会の模様を報告申し上げます。

今回の特徴は中国文部省国際交換協会と米国フルブライト協会の共催であったこと、北京で第一回として、初めて中国で行われたことでした。遠方のこともあり、米国47支部の中、17支部しか参加がなかったこと、世界の国の数としては17カ国と例年に比して少なかったことは事実ですが、中国の国をあげての熱気は充分伝わってきました。

中国から米国へのフルブライト交換学生の数は日本より少なく現在は毎年40名です（日本は08年度54名）。大学の教授が多いようですが、色々な役所の委員を兼務している人も多いようで、演説のときは紋切り型の印象でしたが、段々と迫力が迸ってきて、一対一で話し込むと彼らの情熱は日本のその昔の明治維新の志士を彷彿させるものがありました。

総会、支部、国別活動報告会、分野別（科学、文化、芸術、金融、経済、ジャーナリズム、教育、国際教育）と分かれていて、それぞれにベテランの司会者が仕切って、参加者からの質問も満足がいくまで徹底的に時間をとるというプログラムには驚きました。分野別には濃淡はありますが、専門知識豊かなパネリストが2～3名、それに必ず中国のフルブライター1名が対応する形で構成されていました。この大掛かりな計画と行き届いた配慮は米国最高本部の中心のMs. Andersonの力量、総活力の結晶そのものでした。パネリストの中にはアメリカの一級の人材が、難解な語彙を駆使して演説するので、大学院より高度なスピーチとなり、大半は米国人の参加者なのでよいのですが、英語が母国語でないものにはかなり厳しい水準でした。

辛抱づよく全部の分科会に出席しましたが、米国の現在の問題点、それに対する取り組み、未来の展望と矢継ぎ早にポイントを突いた質問があり、しかも感心したのは日本流に質問者も回答者も体裁、体面はかまわず、くどいほど時間をかけ、司会者は時間をオーバーしても、ほとんどの出席者が満足するまで丁寧に進行させるということに徹していました。

第1日目の10/20は、総会の後、文化、芸術、とくに現在力を入れている舞踏の奨学制度の討論がありました。Xu Changjun, 北京中央音楽大副学長・教授で著名な作曲家の熱弁が光りました。午後おそくから各支部のフルブライト同窓会の現状報告が10分ずつあり、日本の現状報告を事務局長がおこないました。

第2日目は午前中、科学と環境の分科会と財政、ビジネスの分科会が開かれました。午後はround table discussion 1部と2部にわかれて24組で行われ、1部では賀来理事長、2部では大野事務局長が司会を勤めました。テーマはそれぞれ「Reexamination of the Fulbright Program」「China's Economic Growth」でした。

第3日目は午前中まずジャナーリズムとコミュニケーション、次に教育の分科会が、昼から国際教育の分科会がありました。

米国からの参加者は中国のフルブライターと仲良くなって議論の最中に、いまの中央集権のシステムは早く欧米の民主主義のように野党の声も尊重する制度に変えるべきではないかと厳しく迫る場面がありました。個々の中国人の表現は異なりましたが、「13億の大所帯で70民族に分かれここまでやっとまとまってきた。今のところこの束ねる力を弱めるとマイナスが多く、しばらくこのままで行くのがベストである」と答えました。

北京のスモッグの対策も：①自動車の排ガス　②石炭（70%）の使用　③黄土対策について詳しい説明があり、①自動車は金持ちになっていくにつれて排ガス対応車に切り替える、②は石油に変えていく、③はポプラを植林する、と真に理路整然として、改善に向かう方向がわかりました。水の問題も、黄河から揚子江に既に運河とパイプでほぼ解決済みとのこと。生産性の低い農業は高齢者の急速な減少で、1人当たりの所得増加が急激に改善されると数字をあげた説得性のある話でした。

日本で会議前に勉強していった書物、雑誌では悲観論が3分の2位でしたが、中国側のフルブライター留学生の自信満々、10%前後の毎年の成長実績、なりよりも自分のエゴより国益という昔の日本人、維新の志士を感じさせる熱血漢達に出会ったことで今後とも対等に付き合っていきたいと痛感した後味の良い実りを感じた総会でした。

北京フルブライト世界総会に参加して

福田　学
1984 American U.
平成20年11月

10月20日から22日の間世界大会に参加させていただくことができました。日程の都合上一部参加できないプログラムもありましたが、3日間様々なテーマでの発表がされ且つ活発な質問がされていました。総会全体の発表の一項目の "best practice" においては各国またアメリカのフルブライターに混じって、パネリストの一人として東京フルブライト・アソーアソーシエーションの大野事務局長のほうから募金活動及び会員が減少傾向などの日本の今後の活動の問題点についての報告がされました。又、第2日には論点別にRound Tableが開催されました。その中で賀来理事長（議題A Reexamination of the Fulbright Program in Japan）及Temple University（毎年東京キャンパスで数ヶ月経営関係の講座を担当）のProfessor Portwoodのchair（議題　Synergies from Cross-National Economic Cooperation: Why Japan, China, and India should be seeking Opportunities for Collaboration）によるセッションに概ね1時間半ずつ参加させていただきました。

特に賀来理事長による Round Tableについて

1. 会員の減少について、あるいは一般社会からの関心の低下については韓国のGranteeであったPresidentより同様の悩みが報告されました。日本はアジアの各国などに対してフルブライト奨学金と同様の制度を運営していくべきではないかとの話がありました。又.専門分野以外においても多岐多様な意見が出されて議論は白熱であったと思います。アメリカのGranteeであった人からは逆にフルブライト奨学金はアメリカ政府の外交の一手段に過ぎず、日本政府の方針に従って考えていけばいいだけだとの話も出ました。

フルブライトの奨学金は現在32分野にわたって支給されていて様々な分野に人材が分散しているメリットがあると思われました。

総括としては、フルブライト奨学金がベースにあっても、近隣諸国、特に中国・韓国の同窓会等と交流をさらに深め、意見交換を通じて次善の策を練り実現していくことが可能であるとの印象を非常に深く持ちました。また、将来的には他のアジア諸国あるいは世界のその他の国々の方々との交流なども考えることが可能です。日本にとっては日米関係の延長線上のものだけでしかなかったものをアジアの交流の場さらには世界との交流の場として考えることができるとの感想を持ちました。国内の認知度を再び上げるためにもこのような多国間での交流を社会一般にマスメディアなどを通じて紹介し、今後の活動に寄与していくことが考えられるのではないでしょうか。

なお、現在進行形でもある世界総会の成果として "Task Force" の紹介をさせていただきます。総会のパネルディスカッションなどを踏まえて、世界規模での連携が今後の活動に欠かせないとの認識から、アメリカの事務局のサポートも得ながら、ワシントンDC地域の同窓会の会長の Mr. Keisuke Nakagawa（日系のアメリカ人フルブライター）が自由・自主参加ベースで今後広く意見を求め集約していくtask force の立ち上げを発案しました。名称はThe Interconnected Fulbright Task Forceとし、目標は3項目。1. Growth：To grow the Fulbright alumni membership to its full potential. 2. Support: To support the growth and startup of Fulbright chapters and associations around the world. 3. Interconnectivity: To connect Fulbrighters around the world. とすることが考えられています。

この活動については、アメリカサイドが主導していくことが予想されますが、他国からは、中国、ドイツなどの参加も予想されています。会員の減少が予想されるなかではありますが、今後この活動については長坂会長、大野事務局長、関係者各位および諸先輩にご指導とご助言をいただきながら進めていくことを考えています。Task Forceにおける議論にできるだけ参加し、日本の同窓会の存在感を持たせ、また東京フルブライト・アソシエーションにおいて1年程度かけて議論を行った将来の日本の同窓会の "vision" などを他国にも紹介していきたいと思います。

同窓会メンバーの掲示板

「同窓会メンバーの掲示板」は皆様が自由に使えるスペースです。「NEWS LETTER」は年一回、年末の発行ですが、本の紹介、イベントのお知らせ、ボランティアの募集、また悲しい訃報など、掲示板をお使いください。（お問い合わせは東京フルブライト・アソシエーションまで）

新刊紹介

「セクシュアル・ハラスメント　性と権力の迷宮」
ヘレン・ガーナー 著　　石橋 百代 訳

（原題「THE FIRST STONE」　明石書店　2008年1月刊）

同窓生の石橋百代さん（1979　Georgetown U.）の訳書が出版されました。

名門の学寮で、深夜パーティーの最中、学寮長にセクハラされた、と二人の女子学生が訴えた。学寮長は容疑を全面的に否認――現代オーストラリアを代表する作家が藪の中の事件を徹底的に追跡し、セクハラ問題を世に問うベストセラーのルポルタージュである。

ヘレンが取材を始めるや、女子学生の周囲には厚い壁が幾重にも築かれた。体当たりで突進する彼方に仄見えてきたのは――二人を支援する急進的な新フェミニストの存在。彼女たちは“セクハラは権力の行使”との信条と女性差別への反撥から、大学、学寮の男性権力者層や学寮長の擁護派と対決する。当初単純だと思われていたこの出来事は、さまざまな因子が絡み合って、多くの人々を巻き込む大事件に変異していく。――

セクハラ事件をこれだけ綿密に追跡した類書はない。わが国でもセクハラ問題に対する社会全般の意識が高まっている折柄、各自がこの問題と真摯に向き合う格好の書となろう。

ヘレンは二人との接触を阻まれ周囲からの取材を余儀なくされたが、それが結果的には幅広い人々との多彩なインタビューとなり、ルポルタージュに読み物としての厚みを加えている。

ジャーナリスト松尾秀助氏（フルブライト同窓生）「いや、とっても面白いですね。〈後略〉」

作家・翻訳家常盤新平氏「この問題が一筋縄ではいかないのを知りました」

日本写真保存センター

早川　与志子
1985　Northeastern U., Radcllife U., Harvard U.

昨年から、「日本写真保存センター設立」プロジェクトに関わっています。

このプロジェクトは、写真の原板（フィルム、乾板など）を保存する施設の設立を目的として、（社）日本写真家協会が中心となって立ち上げたものです。

写真がフランスで発明されたのは約170年前、日本に入ってきたのはその10年後です。時代や生活を記録する写真は歴史の証人でもあり、次世代に継承すべき文化財産だと言えます。ところが、いまその写真が危機に瀕しています。

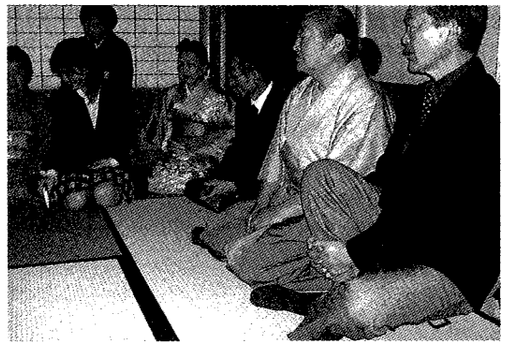
写真の原板は、写真家が存命中はご自身が保存・管理されている場合がほとんどですが、亡くなった後、ご遺族の方がその扱いに困惑されていることも多く、また原板の劣化、或いは散逸の恐れもあるため、その収集・保存・管理が急務となっています。諸外国では、公共機関がそれらの任務を果たしていますが、日本にはそのような施設がありません。

昨年と今年、文化庁の委嘱を受けて、国内の物故作家の撮影したフィルムの保存状況、欧米のアーカイブや写真美術館の保存・修復・利活用の調査を行いました。私も調査委員で調査活動に参加しています。今夏はオランダとイギリスに行きましたが、その設備の充実振りは大変羨ましく、写真が文化としてきちんと定着している社会との差を実感しました。

昨年2月まで、文化事業のプロデューサーをしていた私は、特に写真に対する想いが深く、世界初のピュリツァー賞の写真展を日本で実現するなど、フォトジャーナリズムの展覧会を企画・制作してきました。一日も早く写真保存センターが設立され、日本の文化遺産である写真を保存したいという強い気持で、このプロジェクトに参加しています。

鎌倉腰越で お茶を楽しみませんか！

松尾　秀助
1977　American U.



ひょんなことから三年前にお茶の稽古に誘われて、鎌倉の腰越（藤沢市との境界近く、江ノ島のそば）に通っています。月末の日曜日、午後1時に友人が渋谷で拾ってくれて、車で2時間。鎌倉海岸の渋滞を抜けて、腰越の丘の上、「きよこ」という宿坊に着きます。ここに茶室があり、宿泊客はタダで使わせてくれるのです。先生は藤沢から来てもらいます。

なにせ60歳過ぎのロートル2人と50代後半のオヤジの3人です。月1度のお稽古では次のときにはすっかり忘れています。ジョージ・オーウェルの『アニマル・ファーム』に出てくる馬が、ABCを習っても、XYZを覚える頃にはABCをすっかり忘れているのと同じです。先生は辛抱強く、繰り返し教えてくれますが、駄馬は駄馬でしかありません。

それでも3年が過ぎ、いま4年目に入るのですが、さすがに基本の袱紗のさばきや、お手前の手順などはいい加減ながら身についてきているようで、11月にもお茶会でお手前を披露したりしました。

じつは、こんなにお茶のお稽古が続いた秘密は、泊まる「きよこ」という宿坊の魅力にあるのです。江ノ島、相模灘、富士山などを一望にする独立峰の丘の上にあるロケーションもさることながら、庵主の文佳（ふみか）さんという私と同年輩の女性が、なんともステキなのです。夕飯はなしで、朝食だけのB＆Bなのですが、その朝食が腰越名物しらす飯をはじめ、心のこもったおいしさで、量もちょうどいいのです。夕方、お茶の稽古の難行苦行が終わってから、腰越にある何軒かの料理屋でビールを飲み、ワインや焼酎、日本酒を飲み、魚中心の料理を食べる幸せ！　ただ、宿坊は女性だけの管理なので夜の門限が9時まで。うっかり飲み過ごすと野宿を強いられます。

さて、そんなお茶のお稽古を気軽にやりませんか、というお誘いです。第2日曜日と第3金曜日の午後1時から3時まで。料金は3000円で、場所はこの「きよこ」です。申し込みはわれらの先生（裏千家）の横山宗和先生で0466-81-4745です。「きよこ」の住所は、鎌倉市腰越2-23-12（☎0467-32-7728）です。このお稽古は立礼（椅子による茶席）なので、足がしびれて立てない、なんてことはありません。念の為。

次回セミナーのお知らせ

平成21(2009)年1月16日(金)　午後6時から
山王グランドビル地下会議室にて
講師　定森 大治氏（元朝日新聞社）
「アラブ世界に住んで日本を見る」

■訃　報■

信原　尚武（のぶはら　なおたけ）**氏**

1972　U. of Michigan
（元・産経新聞社常務取締役。経済部長、ロンドン支局長、ニューヨーク支局長などを歴任。平成20年9月19日逝去。享年68）

フルブライトの、そして産経新聞の本当に頼りになる先輩だった。会うといつも人懐こそうに、「元気？」と声をかけてくださった元気一杯の信原さん。いまもその姿が脳裏を去らない。いくら原稿が早かったといって、あんな足早で逝ってしまう必要などなかったのに。

（千野境子　産経新聞論説委員）

事務局からのお知らせ

1. 皆様のご協力でやっとできあがりました。事務局も又次年度に向けてスタートです。百年に一度の経済混乱の年だそうですが、乗り切ってまいりましょう。皆様のご多幸をお祈りして。（大野）

2. 2009年度総会・講演会の予告

来年度の総会は5月28日（木）国際文化会館において開催予定で、総会後の講演は、東京大学教授・藤原帰一氏の予定です。改めてご案内申し上げますが、ぜひご予定置き下さい。

3. 遺贈によるご寄付について

今回のフルブライト上院議員生誕100周年記念第6回個人募金では、ご寄付方法のひとつとして、財団法人日米教育交流振興財団が中央三井信託銀行と「遺贈による寄付制度」で提携し、遺言により財産の一部をフルブライト・プログラムにご寄付いただける方々のご便宜を図ることといたしました

この制度をご利用になれば中央三井信託銀行の専門スタッフが、寄付（遺贈）を含む遺言書の作成に関するアドバイス（相談料無料、相談内容の機密保護）、遺言書作成の協力、遺言書の保管・管理および遺言の執行までを一貫して引き受けてくれます（同行所定の手数料がかかります）。ぜひご活用下さいますようご案内申し上げます。

財団法人日米教育交流振興財団へ遺贈された財産は、相続税の非課税財産となります。お問い合わせは下記中央三井信託銀行へお願いいたします。

東京フルブライト・アソシエーション
〒100-0014　東京都千代田区永田町2-14-2
山王グランドビルB135
TEL: 03-3503-1841　FAX: 03-3503-0758
E-mail: fulb@fulbright.or.jp
http://www.fulbright.or.jp

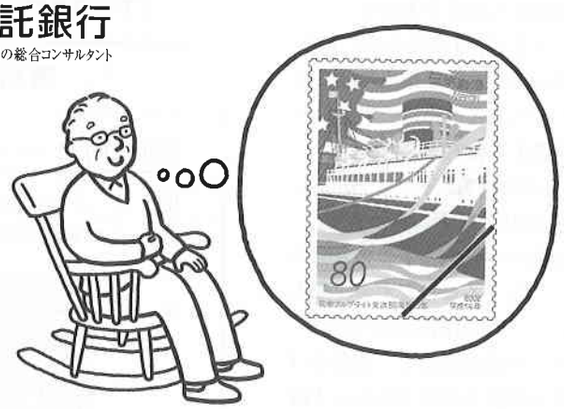
（HPは、日米教育委員会のHPとリンクしており、日米教育委員会から米国フルブライト・アソシエーションを経由し、グローバル・フルブライト・ネットワークにアクセスが可能です。）

遺言信託について　中央三井信託銀行からのおしらせ

当社は、財団法人日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）の「遺贈による寄付制度」の提携信託銀行です。遺言信託を通してみなさまの篤志の実現をお手伝いいたします。

中央三井信託銀行
●遺言・相続 ●不動産 ●ローン ●資産運用の総合コンサルタント

遺言で財産の一部をフルブライト・プログラムに寄付したい。
相続、安心。



遺言書作成のお手伝いから
遺言書の保管、
遺言の執行まで
ご意思を確実に実行いたします。
中央三井の遺言信託

◎当社はフルブライト記念財団の「遺贈による寄付制度」提携信託銀行です。＊この制度により寄付をされる場合は下記の基本保管料が30%割引となります。

【遺言信託標準報酬等（消費税等含む）】（平成20年10月1日現在）
●遺言書作成時：基本保管料105,000円および保管料（年間6,300円の月割り計算）●遺言書保管中：年間保管料6,300円　●遺言書変更時：変更遺言書保管料52,500円　●遺言執行時：遺言執行標準報酬（財産の相続税評価額に当社規定の率を乗じた額。ただし、最低報酬は105万円。）
詳しくは窓口までお問い合わせください。

中央三井信託銀行　営業企画部　財産管理業務センター　届出第7号
〒105-8574　東京都港区芝3丁目33番1号
TEL.03-5232-8627

アメリカン・ニュー・グランティー歓迎会